

東京国立文化財研究所要覽

1994

平成6年度

はじめに

平成6年度は、東京国立文化財研究所の前身である美術研究所設立以来64周年を迎えた。昨年改組された国際文化財保存修復協力室も、国際的な文化財保存修復に関する協力のためのセンター構想の充実化に向けて大きく前進した年でもある。また、諸外国からの強い要望に応じてはじめられた、「紙の保存修復」国際研修も第3回目を数え、12ヶ国12名の研修生を受入れ実施された。一方、昭和61年から進めてきた敦煌莫高窟壁画保存修復事業については、平成2年度に敦煌研究院と合意書を取り交わし、平成3年度より5カ年にわたる本格的な日中共同研究が進められている。さらに海外所在の日本古美術品修復事業も昨年に引き続いて、ワシントン・フリーア美術館所蔵の日本絵画の修復を実施し、またスミソニアン研究機構との保存科学研究交流や文化財保護に関する日独学術交流も引き続き順調に進行中である。その他の国際交流事業としては、本年度18年目となる国際研究集会を「文化財保存における分光学的手法」のテーマのもと、9名の研究者を海外から迎えて、充実した討議が行われた。この他文化財に関する個別的研究成果についても、高い評価を得ることが出来たことは、喜びに堪えない。

また、長年の宿願であった施設新営に向けて実施設計のための経費が認められ、本格的な発掘作業に着手できたことは特筆に値することである。

この年度を終わるに当たって、5名の職員を転出等で見送ることになったが、当研究所の発展に尽力された諸氏の御努力に対し心から敬意と謝意を表する次第である。

平成7年3月

東京国立文化財研究所長

西川 杏太郎

目 次

I. 沿革	1
1. 設立の経緯	1
2. 年代別重要事項	1
3. 歴代所長	6
II. 機構・職員・予算	7
1. 機構	7
2. 職員	8
3. 名誉研究員	11
4. 予算	12
5. 特別研究一覧	13
6. 科学研究費補助金交付一覧	13
7. 受託研究一覧	14
III. 調査研究	15
中長期研究計画一覧	15
1. 美術部	17
(1) 概要	17
(2) 各論	18
2. 芸能部	22
(1) 概要	22
(2) 各論	23
3. 保存科学部	25

(1) 概 要	25
(2) 各 論	26
4. 修復技術部	39
(1) 概 要	39
(2) 各 論	40
5. 情報資料部	43
(1) 概 要	43
(2) 各 論	44
6. 国際文化財保存修復協力室	49
(1) 概 要	49
(2) 各 論	50
7. 国際調査研究	55
(1) 敦煌文化財保存修復に関する調査研究	55
(2) スミソニアン研究機構との国際研究協力	57
(3) 海外所在日本美術品調査	57
(4) タイ国石造遺跡の劣化現象と保存処置に関する調査研究	58
(5) 文化財保護に関する日独学術交流	58
(6) シリア、アインダーラ神殿遺跡石彫レリーフの保存修復	58
8. 主要研究業績	60
IV. 事 業	78
1. 出 版	78
(1) 美術研究	78
(2) 日本美術年鑑	79
(3) 芸能の科学	79
(4) 保存科学	79

(5) 国際研究集会プロシーディングス	80
2. 黒田清輝巡回展	81
3. 公開学術講座	82
4. 夏期学術講座	83
5. 博物館・美術館等保存担当学芸員研修	84
6. 国際研究集会	86
7. 第3回「紙の保存修復」の国際研修	88
8. 会 議	90
(1) 文化財保存修復研究協議会	90
9. 国際・国内交流	92
(1) 職員の海外渡航	92
(2) 招へい研究員等	96
(3) 海外研究者等の来訪	100
V. 研究施設・設備	101
1. 蔵 書	101
2. 資 料	102
3. 主要機器・設備	103
4. 黒田記念室	107
5. 閲 覧 室	107
VI. 関係法規	108

I. 沿 革

1. 設立の経緯

東京国立文化財研究所は、昭和27年4月1日に発足したが、その前身であり母体となったものは、昭和5年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、大正13年7月、帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄附出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選択を伯爵牧野仲顯に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鏗二郎及び東京美術学校長正木直彦とはかつて諸方面の意見を徴し、また、わが国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

- (1) 美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
- (2) 黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
- (3) 前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
- (4) 事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

2. 年代別重要事項

昭和元年12月 前記の事業を遂行するため委員会が組織され、東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・同岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清、建物造営については東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。

昭和2年2月 美術研究所準備事業を開始した。

同 年10月 東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192㎡の建物1棟を起工した（本館）。

沿革

- 昭和3年9月 前記の建物が竣工したので、黒田記念館と名付け、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また、館内に黒田子爵記念室を設け、黒田清輝の作品を陳列した。
- 昭和4年5月 遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。
- 昭和5年6月28日 勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。
- 同 年10月17日 美術研究所開所式を挙行了た。
- 昭和7年1月 美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期行物『美術研究』を創刊した。
- 同 年4月18日 株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う5か年間毎年5千円、合計2万5千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。
- 同 年5月26日 帝国美術院はこの申出を受理した。
明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。
- 昭和9年10月18日 毎年10月18日を開所記念日と定めた。
- 昭和10年1月28日 鉄筋コンクリート造、2階建、延面積129㎡の書庫が竣工した。
- 同 年4月 『日本美術年鑑』の編纂事務を開始した。
- 同 年6月1日 勅令第148号により美術研究所官制が公布された。
研究資料閲覧規定を制定し、閲覧事務を開始した。
- 昭和12年6月24日 勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。
- 同 年11月29日 美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。
- 昭和13年2月12日 木造、平屋建、延面積97㎡の写真室1棟が竣工した。
- 昭和19年8月10日 黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。

昭和20年5月28日 美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町1丁目本間家倉庫3棟に疎開した。

同 年7～8月 酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市の外牧曾根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。

昭和21年3月29日 酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。

同 年4月4日 酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し、引揚げを完了した。

同 年4月16日 東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。

昭和22年5月1日 美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。

国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた(保存科学部の前身)。昭和23年度より専任の職員を配置し、研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室(66㎡)に設けた。

昭和25年8月29日 文化財保護法の制定にともない、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。

同 年8月29日 文化財保護委員会事務局設置にともない、保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。

昭和26年1月31日 美術研究所組織規程が定められ第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。

昭和27年4月1日 文化財保護法の一部が改正、東京文化財研究所組織規程が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の3部1室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。

また、文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。

同 年7月1日 芸能部研究室として東京芸術大学音楽学部邦楽科教室2室を同大学から借用し、研究を開始した。

沿革

- 昭和28年4月26日 保存科学部研究室として、東京国立博物館構内の倉庫132㎡を改造のうえ移転した。
- 昭和29年7月1日 東京文化財研究所組織規程の一部が改正され、東京国立文化財研究所となった。
- 昭和32年3月22日 東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平屋建、8㎡の保存科学部の薬品庫が竣工した。
- 同年11月30日 従来の2階建書庫のうえにさらに1階を増築3階建とし、増築分延面積71㎡が竣工した。
- 昭和34年4月30日 東京国立文化財研究所研究受託規程が定められ、この年度から受託研究が開始された。
- 昭和36年9月16日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、従来の庶務室は庶務課となった。
- 昭和37年3月31日 東京国立博物館内に保存科学部庁舎（保存科学部実験室）として、鉄筋コンクリート造、2階建、延面積663㎡の建物1棟が竣工した。
- 同年7月1日 東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。
- 同年7月20日 芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工にともない、旧保存科学部庁舎に移転した。
- 昭和43年6月15日 文部省設置法の一部が改正され、本研究所は文化庁附属機関となった。
- 昭和44年8月23日 保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延1,950.41㎡）の起工式が行われた。
- 昭和45年3月25日 前記の別館が竣工したので、同年5月26日竣工式が行われた。
- 同年3月25日 芸能部は、別館3階に移転した。
- 同年5月8日 保存科学部は別館の地階～2階に実験用機械類の移転据付を完了した。
- 同年6月29日 保存科学部庁舎の1階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が完了した。
- 同年11月2日 所長及び庶務課は、本館から保存科学部庁舎の1階に移転し

た(本館は、美術部庁舎となる)。これにより研究所の所在地表示は「12番53号」が「13番27号」に変更された。

昭和46年4月1日 保存科学部庁舎及び別館の敷地2.658㎡を東京国立博物館から所管換された。

昭和48年4月12日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部が設けられ4部1課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。

昭和52年4月18日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、情報資料部の新設により5部1課となり、情報資料部に文献資料研究室及び写真資料研究室が置かれ、美術部資料室は廃止された。

昭和53年3月20日 本館構内の写場等(木造、平屋建、延面積144㎡)を取りこわし、情報資料部研究棟として、鉄筋コンクリート造、地下1階、地上3階、延面積569.95㎡の建物が竣工した。

昭和53年4月5日 文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部に第三修復技術研究室が置かれた。

昭和59年6月28日 文部省組織令が改正され、本研究所は文化庁施設等機関となった。

平成2年10月1日 文部省設置法施行規則の一部が改正されて新たにアジア文化財保存研究室が置かれ、5部1室1課となった。

平成5年4月1日 文部省設置法施行規則の一部が改正されてアジア文化財保存研究室は、国際文化財保存修復協力室となった。

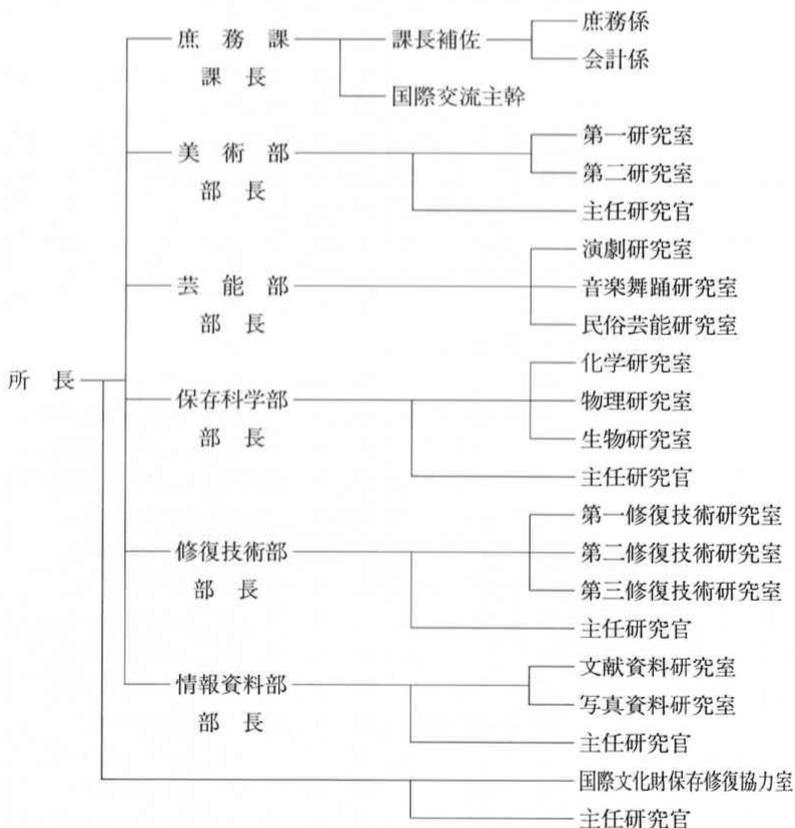
3. 歴代所長 (昭和5年～平成6年)

主 事	正 木 直 彦	(昭和 5. 6.28～昭和 6.11.24)
主 事	矢 代 幸 雄	(昭和 6.11.25～昭和10. 5.31)
所長事務取扱	和 田 英 作	(昭和10. 6. 1～昭和11. 6.21)
所 長	矢 代 幸 雄	(昭和11. 6.22～昭和17. 6.28)
所長事務取扱	田 中 豊 藏	(昭和17. 6.29～昭和22. 8.15)
所 長	田 中 豊 藏	(昭和22. 8.16～昭和23. 5.10)
所 長 代 理	福 山 敏 男	(昭和23. 5.11～昭和24. 8.30)
所 長	松 本 栄 一	(昭和24. 8.31～昭和27. 3.31)
所長事務代理	矢 代 幸 雄	(昭和27. 4. 1～昭和28.10.31)
所 長	田 中 一 松	(昭和28.11. 1～昭和40. 3.31)
所 長	関 野 克	(昭和40. 4. 1～昭和53. 4. 1)
所 長	伊 藤 延 男	(昭和53. 4. 1～昭和62. 3.31)
所 長	濱 田 隆	(昭和62. 4. 1～平成 3. 3.31)
所 長	西 川 杏太郎	(平成 3. 4. 1～現 在)

II. 機構・職員・予算

東京国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成およびその公表を行うことを目的として設立された文化庁の施設等機関である。その機構等は次のとおりである。

1. 機 構



2. 職 員

(平成7年3月30日現在)

所 属	職 名	氏 名	専 門 分 野
所 属	長 課	西 川 杏太郎	(美術史)
庶 務	長 課	山 代 文 雄	
	国際交流主幹	貴 志 辰 夫	
	課 長 補 佐	篠 原 一 夫	
庶 務	係 長	浅 見 清	
	係 員	宮 腰 香代子	
	事 務 補 佐 員	中 村 節 子	
	"	武 田 知 子	
	"	勝 木 なほ子	
	"	鈴 木 紀 枝	
	調 査 員 (非)	大 江 佐知子	
会 計	係 長	大 堀 岳 満	
	主 任 員	日 高 信 二	
	係 員	渡 邊 重 夫	
	事 務 補 佐 員	時 田 真 理	
	"	瀧 澤 桂 子	
	勞 務 補 佐 員	菊 地 廣 吉	
美 術	部 長	鶴 田 武 良	(中国絵画史)
	主 任 研 究 官	島 尾 新	(日本中世絵画史)
	"	田 中 淳	(日本近代絵画史)
	"	山 梨 繪美子	(日本近代絵画史)
	"	岡 田 健	(中国彫刻史)
第 一 研 究 室	室 長	中 野 照 男	(東洋絵画史)
	調 査 員 (非)	佐 野 みどり	(日本絵画史)
第 二 研 究 室	室 長	三 輪 英 夫	(日本近代絵画史)
芸 能 部	部 長	蒲 生 郷 昭	(日本音楽史)
演 劇 研 究 室	室 長	鎌 倉 惠 子	(日本近世演劇)
	調 査 員 (非)	細 井 尚 子	(中国演劇)
音 樂 舞 蹈 研 究 室	室 長	羽 田 昶	(日本中世演劇)
	研 究 員	高 桑 いづみ	(日本音楽史)
	調 査 員 (非)	石 井 倫 子	(日本中世演劇)

所 属	職 名	氏 名	専 門 分 野
民俗芸能研究室	室 長	中 村 茂 子	(民俗芸能)
	調 査 員 (非)	山 本 宏 子	(民俗音楽)
保 存 科 学 部	部 長	三 浦 定 俊	(計測工学)
	主 任 研 究 官	佐 野 千 絵	(光化学)
化 学 研 究 室	室 長	平 尾 良 光	(無機化学)
物 理 研 究 室	室 長 事 務 取 扱	三 浦 定 俊	(計測工学)
	研 究 員 (併)	石 川 陸 郎	(光学)
生 物 研 究 室	室 長	門 倉 武 夫	(環境科学)
	研 究 員	木 川 り か	(生物化学)
	調 査 員 (非)	山 野 勝 次	(応用昆虫学)
	"	新 井 英 夫	(微生物学)
修 復 技 術 部	部 長	宮 本 長 二 郎	(建築史)
	主 任 研 究 官	川 野 邊 涉	(高分子化学)
第 一 修 復 技 術 研 究 室	室 長	中 里 壽 克	(漆芸技法)
第 二 修 復 技 術 研 究 室	室 長	増 田 勝 彦	(装潢技術)
	研 究 員	尾 立 和 則	(装潢技術)
第 三 修 復 技 術 研 究 室	技 術 補 佐 員	坂 本 雅 美	
	室 長	青 木 繁 夫	(考古学)
	技 術 補 佐 員	犬 竹 和	
情 報 資 料 部	部 長	廣 井 雄 一	(日本工芸史)
	主 任 研 究 官	井 手 誠 之 輔	(東洋絵画史)
	"	長 岡 龍 作	(日本彫刻史)
文 献 資 料 研 究 室	室 長	米 倉 迪 夫	(日本中世絵画史)
写 真 資 料 研 究 室	研 究 員	勝 木 言 一 郎	(中国絵画史)
	室 長	鈴 木 廣 之	(日本近世絵画史)
国 際 文 化 財 保 存 修 復 協 力 室	専 門 職 員	野 久 保 昌 良	(美術写真)
	室 長	西 浦 忠 輝	(材質改良学)
	主 任 研 究 官	松 本 修 自	(建築史)
	研 究 員	朽 津 信 明	(地質学)
保 存 科 学 部	客 員 研 究 員	二 宮 修 治	(無機化学)
修 復 技 術 部	"	松 田 史 朗	(腐食工学)
情 報 資 料 部	"	伊 與 田 光 宏	(情報工学)

機構・職員・予算

平成6年度における異動者

所 属	官 職 名	氏 名	異 動 日	異 動 内 容
庶 務 課	課 長	山 代 文 雄	平 6. 4. 1	転 入
	課 長 補 佐	篠 原 一 夫	平 6. 4. 1	昇 任
	係 長	浅 見 清	平 6. 4. 1	昇 任
	係 長	大 堀 岳 満	平 6. 4. 1	配 置 換
	主 任	日 高 信 二	平 6. 4. 1	昇 任
	係 員	渡 邊 重 夫	平 6. 4. 1	転 入
	係 員	渡 邊 重 夫	平 6. 5. 1	配 置 換
	係 員	宮 腰 香 代 子	平 6. 5. 1	配 置 換
	事 務 補 佐 員	鈴 木 紀 枝	平 6. 4. 1	採 用
	事 務 補 佐 員	森 晃 子	平 6. 5. 1	採 用
	事 務 補 佐 員	松 浦 桂 子	平 6. 7.18	採 用
	事 務 補 佐 員	武 田 知 子	平 6.10. 1	採 用
	事 務 補 佐 員	時 田 真 理	平 6. 8. 1	採 用
	事 務 補 佐 員	瀧 澤 桂 子	平 6.10.17	採 用
	美 術 部	主 任 研 究 官	岡 田 健	平 6. 7. 1
主 任 研 究 官		田 中 淳	平 6.11. 1	転 入
芸 能 部	調 査 員 (非)	細 井 尚 子	平 6. 4. 1	採 用
	調 査 員 (非)	石 井 倫 子	平 6. 4. 1	採 用
修 復 技 術 部	部 長	宮 本 長 二 郎	平 6. 4. 1	昇 任
	技 術 補 佐 員	坂 本 雅 美	平 6. 7. 1	採 用
情 報 資 料 部	主 任 研 究 官	長 岡 龍 作	平 6. 7. 1	昇 任
	調 査 員 (非)	玉 蟲 敏 子	平 6. 4. 1	採 用

平成6年度における退職者等

所 属	官 職 名	氏 名	在 所 期 間	備 考
庶 務 課	主 任	日 高 信 二	平 4. 4. 1~平 7. 3.31	転 出
	事 務 補 佐 員	望 月 紀 子	平 4. 7.27~平 6. 4.30	辞 職
	事 務 補 佐 員	森 晃 子	平 6. 5. 1~平 6. 7.15	辞 職
	事 務 補 佐 員	松 浦 桂 子	平 6. 7.18~平 6. 9.30	辞 職
	事 務 補 佐 員	山 田 文 子	平 4. 1. 1~平 6. 9.30	辞 職

3. 名誉研究員

氏名	退職時官職名	在所期間	名誉研究員 発令年月日
白畑よし		昭5. 6.30~昭27. 8. 1	53.10.18
高田修	美術部長	昭27.12. 1~昭44. 3.31	〃
登石健三	保存科学部長	昭27.10. 1~昭50. 4. 1	〃
岡畏三郎	美術部長	昭20. 5.15~昭51. 4. 1	〃
関野克	所長	昭40. 4. 1~昭53. 4. 1	〃
秋山光	美術部第一研究室長	昭16.10. 1~昭42. 2. 1	54.10.18
久野健	情報資料部長	昭20. 5.31~昭57. 4. 1	57.10.18
川上涇	美術部長	昭21. 2.28~昭57. 4. 1	〃
関千里代	美術部第二研究室長	昭18.12.15~昭58. 4. 1	58.10.18
横道万里雄	芸能部長	昭28. 3.16~昭51. 4. 1	59.10.18
上野アキ	情報資料部文献資料研究室長	昭17.11. 3~昭59. 4. 1	〃
江上綏	情報資料部主任研究官	昭38. 5.18~昭59. 3.31	〃
田村悦子	美術部主任研究官	昭22. 6.16~昭60. 3.31	60.10.18
猪川和子	情報資料部文献資料研究室長	昭22. 6.27~昭60. 3.31	〃
伊藤延男	所長	昭53. 4. 1~昭62. 3.31	62.10.18
柳澤孝	美術部長	昭21. 9.30~昭62. 3.31	〃
三隅治雄	芸能部長	昭27.10. 1~昭63. 3.31	63.10.18
樋口清治	修復技術部長	昭37.11. 1~昭63. 3.31	〃
田實榮子	美術部主任研究官	昭23. 3.31~平元. 3.31	元.10.18
見城敏子	保存科学部物理研究室長	昭34. 4. 1~平元. 3.31	〃
濱田隆	所長	昭62. 4. 1~平3. 3.31	3.10.18
関口正之	美術部長	昭42. 2. 1~平3. 3.31	〃
佐藤道子	芸能部長	昭34. 4. 1~平4. 3.31	4. 4.18
馬淵久夫	保存科学部長	昭50.10. 1~平4. 3.31	〃
新井英夫	保存科学部長	昭45. 9. 1~平5. 3.31	5.10.18
石川陸郎	保存科学部主任研究官	昭32. 4.15~平5. 3.31	〃

4. 平成6年度予算

()は補正後を表す

事 項	金 額
	千円
人件費	(377,072)
	358,367
運営費	(298,233)
	322,469
事業管理	(32,548)
	36,403
一般研究	(42,778)
	46,195
特別研究	(105,423)
	113,964
受託研究	(2,410)
	2,410
文化財保存修復の国際交流事業の促進等	(115,074)
	123,497
施設費	(119,850)
	141,000
文部省	13,566
各所修繕	7,554
在外研究員旅費	6,012
文化庁	
文化財保存事業費	6,000
計	(814,721)
	841,402

5. 平成6年度特別研究一覧

(補正後)

事 項	金 額
	千円
中国仏教美術基準作品調査研究	6,352
伝統芸能(無形文化財)における「鬼」の実証的研究	4,565
国際文化財保存修復協力センター(仮称)設置のための調査	7,230
有形・無形文化財研究支援データベースシステムの構築に関する調査研究	2,795
文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究	4,672
研究用機器維持費	4,625
文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究	43,286
研究用機器整備(水浸有機物保存処理システム)	31,911
計	105,436

6. 平成6年度科学研究費補助金交付一覧

研究種目	研究課題	研究代表者	交付額
			千円
重点領域研究(A)	化学的・光学的情報を用いた遺跡探査の手法に関する研究	三浦 定俊	9,500
総合研究(A)	雅楽古楽器の総合的調査研究	蒲生 郷昭	2,500
総合研究(A)	古代東アジアの青銅製品鑄造に関する基礎的研究	平尾 良光	5,000
一般研究(A)	文化財の修復に用いられた材料の効果に関する追跡研究	増田 勝彦	11,000
一般研究(A)	東アジア美術における人のかたち	鶴田 武良	2,000

機構・職員・予算

研究種目	研究課題	研究代表者	交付額
一般研究(C)	中央アジア・クチャ地方における中国絵画様式の移入	中野 照男	千円 1,300
一般研究(C)	エミシオグラフィによる象嵌の検出	三浦 定俊	500
一般研究(C)	紙の風邪引き現象の研究	増田 勝彦	2,000
一般研究(C)	プラズマ処理による象嵌遺物の保存処理法の開発研究	青木 繁夫	1,100
試験研究(B)	木造古建築の保存を目的とした外装塗装(丹色塗装)の物性評価	西浦 忠輝	1,600
国際学術研究	タイ国石造遺跡の劣化現象と保存処理に関する調査	西浦 忠輝	2,500
国際学術研究	科学技術を利用した文化財研究法の開発	西川杏太郎	5,800
国際学術研究	中国砂漠地帯における文化財の劣化現象に関する共同研究	宮本長二郎	2,100
国際学術研究	漆・ニスなど伝統的天然樹脂塗膜の劣化と保存に関する研究	三浦 定俊	6,000
計			52,900

7. 平成6年度受託研究一覧

研究課題	受入額
	円
太宰府市大字観世音寺1丁目寺内出土の漆手箱復元に関する研究	800,000
重要美術品、鉄製狛犬及び三十八間星兜の保存修理研究	944,000
重要文化財・鶴岡カトリック教会天主堂擬スタンドガラスの保存研究	361,000
鬼田八幡宮所蔵銅剣の保存修復研究	155,000
絹の劣化度の非破壊計測に関する研究	150,000
計	2,410,000

III. 調査研究

中長期研究計画一覧

部 名	課 題 名	研究代表者	期 間
美 術 部	*美術に関する基礎資料の研究—日本 絵画史年記資料集成15世紀—	鈴木 廣之	平 6. 4 ~平11. 3
	*美術に関する基礎資料の研究—絵画 に見る武装資料—	廣井 雄一	平 6. 4 ~平11. 3
	*美術に関する基礎資料の研究—室町 時代水墨画資料—	島尾 新	平 6. 4 ~平11. 3
	*美術に関する基礎資料の研究—明治 後期~昭和前期美術資料—	三輪 英夫	平 6. 4 ~平11. 3
	*中国仏教美術基準作品調査研究	中野 照男	平 4. 4 ~平10. 3
	*東アジア美術における造形と社会	島尾 新	平 6. 4 ~平11. 3
芸 能 部	*伝統芸能における「鬼」の実証的研 究	蒲生 郷昭	平 4. 4 ~平 8. 3
	*能楽の芸能学的調査研究	羽田 昶	平 2. 4 ~平 7. 3
	*元禄期の浄瑠璃・歌舞伎の研究	鎌倉 恵子	平 6. 4 ~平12. 3
	*「翁」の技法集成	羽田 昶	平 6. 4 ~平 9. 3
	*日本音楽の伝承に関する研究	蒲生 郷昭	平 6. 4 ~平 9. 3
	*伝統的唱歌の研究	高桑いづみ	平 5. 4 ~平 8. 3
	*芸能に用いられる武器の研究	中村 茂子	平 5. 4 ~平 8. 3
保存科学部	*文化財施設内における保存展示条件 の検討	三浦 定俊	平元. 4 ~平 7. 3
	*有機質文化財の光による劣化の定量 的評価法の確立	三浦 定俊	平元. 4 ~平 7. 3
	*新しい文化財防虫防霉法の研究	門倉 武夫	平 6. 4 ~平13. 3

調査研究

部 名	課 題 名	研究代表者	期 間
修復技術部	*文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究	宮本長二郎	平 4. 4 ～平 9. 3
	*文化財の伝統的修復材料の研究（第2期）	宮本長二郎	平 5. 4 ～平 8. 3
情報資料部	*美術情報処理システムの研究—データの共有化を中心として—	廣井 雄一	平 元. 4 ～平11. 3
	*検索辞書システムの研究	米倉 迪夫	平 6. 4 ～平11. 3
	*デジタル画像データの蓄積と活用に関する基礎的研究	鈴木 廣之	平 6. 4 ～平11. 3
国際文化財保存修復協力室	*世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集	西浦 忠輝	平 3. 4 ～平12. 3
	*屋外石造文化財の劣化と保存修復処置に関する研究	西浦 忠輝	平 3. 4 ～平 7. 3
	*文化財の保存を目的とした、レンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究	西浦 忠輝	平 6. 4 ～平10. 3

1. 美術部

(1) 概要

美術部は日本・東洋の古美術並びに日本の近代・現代美術とこれらに関連ある西洋美術についての基礎的調査研究を行い、かつ、その成果を公表することを活動の目的としている。美術部は二室より構成され、第一研究室は古美術を担当し、第二研究室は近代・現代美術を担当している。

調査研究は各時代にわたり、絵画・彫刻・工芸の各分野について、作品と文献資料との両面から実証的に進め、ともに基礎となる研究資料の作成と整理とにつとめている。その他、現代美術の動向に関する調査と資料収集をも並行して行っている。また当部では、作品に対する科学的な鑑識法を早くから積極的に活用してきた。これも当部の研究活動の特色である。なお情報資料部員との間では、研究や調査の面において緊密な協力体制がとられている。

そのほか他機関との共同研究による広領域の研究にも参加している。なお、研究員それぞれの研究課題と内容は(2)の各論の項に示すとおりである。

調査研究の成果は、機関誌『美術研究』（昭和7年創刊）やその他の学会誌に発表し、単行の研究報告も随時刊行している。さらに、研究成果の一部を広く一般の理解に資するために、情報資料部と共同で毎年一回公開学術講座を開催している。また毎年『日本美術年鑑』（昭和11年創刊）を発行している。

なお美術部は黒田清輝の遺産に基づいて創立された美術研究所を前身とする。現在も黒田清輝の作品その他関係資料を保管し、毎週一回木曜の午後にはその多くを陳列する黒田記念室を公開している。

第一研究室

江戸時代までの日本美術及び東アジア地域の美術に関する調査研究並びに資料収集、公表を主務とする。また、『美術研究』の編集を担当している。

第二研究室

明治以降の日本近代美術に関する調査研究と、これに関連する西洋美術及び日本近世の洋風美術の調査研究、並びに現代美術の動向に関する資料の収集と調査とを行っている。とくに現代美術に関する調査研究においては、その年度に収集した資料を整理し、その成果を『日本美術年鑑』として毎年刊行している。平成6年度は、平成5年の内容をもった平成6年版を刊行し、引続き平成7年版の編集に着手した。

また、昭和52年度以来実施してきた黒田清輝巡回展は当研究室が中心となって行っており、平成6年度は飯田市美術博物館で開催した。

(2) 各 論

1. 美術に関する基礎資料の研究

(1) 近代美術資料（明治後期～昭和前期美術資料）

- 1) 明治期美術展覧会資料の研究成果として「明治期美術展覧会出品目録」（東京国立文化財研究所編集，中央公論美術出版刊）を刊行した。
- 2) シカゴ万国博覧会（1893年），パリ万国博覧会（1900年），セントルイス万国博覧会（1904年）の出品目録をデータベース化した。また，前年度撮影した「温知図録」（東京国立博物館蔵）の内容に関する調査を継続した。
- 3) 大正期の美術団体であるヒューザン会，草土社，紅児会，再興院展の出品目録を収集整理した。〈三輪，山梨，田中〉

(2) 室町時代水墨画資料

- 1) 下記的美術館・博物館に於て，室町水墨画及び関連作品の調査を実施した。

初期水墨画 奈良県立博物館

館蔵室町水墨画 栃木県立博物館

雪舟の作品 大和文華館

- 2) 13世紀より16世紀までの水墨画家（約60名）に関する基礎資料の収集と研究史の整理については，下記のように研究会を行った。

ボストン美術館所蔵の水墨画（1994年7月，島尾）

東京国立博物館所蔵の水墨画（1994年8月，救仁郷）

- 3) 収集資料については、逐次、整理を行い、併せてデータベース化を進めた。〈島尾，(情)井手，(研究協力)河合正朝，横田忠司，相沢正彦，大石利雄，山下裕二，小川知二，大西薫，救仁郷秀明〉

(3) 日本絵画史年記資料集成15世紀

一昨年度までに源豊宗編『日本美術年表』・集英社版『原色日本美術年表』に掲出された15世紀の記事のなかから絵画に関する項目約140件を抜粋した。今年度は考古学会編『造像銘記（改訂版）』・久野健『造像銘記集成』を参照して改訂増補をほどこし、絵画219件のほか、関連史料として彫刻156件、工芸56件、書跡14件（合計445件）からなる『15世紀絵画史料年表改訂第1稿』を作成した。また昨年度にひきつづき、1項目ごとについて論文・論説・紹介などの参考文献の収集と銘文解釈の作業を行った。〈(情)鈴木〉

(4) 絵画に見る武装資料

- 1) 下記の寺院に於て関係資料の調査を実施した。

広島県巖島神社 兵庫鎖太刀，長覆輪太刀等

愛知県猿投神社 蛭卷太刀，黒漆太刀等

岩手県中尊寺 藤原三代関係遺品

- 2) 伴大納言絵詞，平治物語絵詞から武装に関する部分を抜粋し、併せて兵範記，中右記，明月記等から関係記事を収集した。〈(情)廣井〉

2. 東アジア美術における造形と社会（5年計画の第1年次）

(1) 制作と享受の場についての研究

- 1) 古代的空間意識と彫像の機能

9世紀に整備される各寺院の配置及びその場での法会と、彫像との関係について基本的な問題の洗い出しに努めた。今年度は、神護寺薬師如来像に続き、神宮寺所在像・神像に考察対象を広げた。

- 2) 寧波・杭州における寺院信仰と絵画

寧波の天台寺院延慶寺における浄土信仰と関連する絵画作品のほか、杭州の上天竺寺と千手観音信仰、妙行寺と祖師像の関係について、

調査研究

資料を収集した。

(2) 流通と交流についての研究

1) 15・6世紀の唐絵とやまと絵

日明間の交渉を示す作例と史料に注目し、当時の唐絵が果たした役割について考察した。成果の一部は美術研究に公表した(361号)。

2) 室町時代における美術の流通と価値観の形成

三阿弥関係の資料及び「北山殿行幸記」「室町殿行幸御傍記」などを総合して、唐物を中心とする美術品の価値観の形成の場、および流通について考察を加えた。

3) 唐本・宋本画像の意味と機能

唐本・宋本として請来された高麗の阿弥陀画像と、その高麗における信仰について、華嚴思想との関係を考察し、日本の来迎図との差異を明らかにした。成果の一部は美術研究に公表した(362号)。

(3) 技術と素材についての史的研究

1) 中国・日本の仏像霊験譚(『法苑珠林』『集神州三宝感通録』『日本霊異記』等)から素材に関わる資料を収集した。

2) 黒川道祐『雍州府志』土産門から専門技術に関する資料を抽出し、様々な技術に対する当時の分類意識を探った。〈島尾、中野、(情)鈴木、(情)井手、(情)長岡、(調)佐野〉

3. 中国仏教美術基準作品調査研究(6年計画の第3年次)

本研究は、中国仏教美術作品のうち、銘記、落款、印章、賛文等によって、制作年、制作地、作者、発願者などが明らかなものを「基準作品」として調査し、基本的なデータや詳細な写真を整備することによって、中国仏教美術の体系を見直し、その特質を明らかにするための「ものさし」を作ろうとするものである。

(1) 研究会(研究協力者会議)の開催

国内所在の中国仏教美術、中国・日本とも深く関わりのある朝鮮半島の仏教美術、また日本における中国仏教美術の受容の諸相について研究を重ねてきた研究者を招き、各自がもつデータを持ち寄り、問題の所在を明らかにするとともに、今後の調査研究の方法等について討議した。

発表の一部は、『美術研究』で公表した(362号)。

本年度の研究発表者は次の5名である。

松田誠一郎(京都市立芸術大学)

宮崎 法子(三重大学)

加須屋 誠(帝塚山学院大学)

山本 泰一(徳川美術館)

井手誠之輔(情報資料部)

(2) 現地調査

年紀を有する中国仏教美術作品を中心に調査し、写真撮影を行なった。本年度は、関西方面(東寺、奈良国立博物館等)で調査を実施した。

(3) 基礎資料の収集

既に国内の各機関、個人等に分散して蓄積されている中国仏教美術作品のデータ、写真等を借覧し、必要に応じてその複製を作成するなどして、基礎資料の収集を行なった。本年度は、主として米国所在の中国仏教美術作品の写真約6,000枚を整理した。

(4) データベースの作成

中国仏教美術研究のための基礎史料として、本年度は、大正新脩大藏経収載の請来目録類、宋高僧伝(中華書局刊)等を入力した。

<中野、島尾、岡田、(情)米倉、井手、長岡、勝木>

4. 近百年中国絵画史研究

20世紀初期の中国における西洋画の受容を中心に研究を行い、「近百年来中国美術年表」の作成を継続した。5月には北京、香港で現代中国絵画の調査を、また12月には中国美術館で第8回全国美術展の調査を行った。<鶴田>

2. 芸能部

(1) 概要

芸能部は、日本の伝統芸能に資するために必要な基礎研究を行うことを目的とし、演劇研究室・音楽舞踊研究室・民俗芸能研究室の三室によって構成されている。芸能部の研究目標としては、諸芸能の理念・構造・技法およびその継承保存に関する研究などがあり、その研究に必要な資料の収集・整備、および記録の作成のための撮影・録音・録画などの作業を行う。研究の成果は、刊行・夏期学術講座・公開学術講座などによって公表する。

平成6年度は、特別研究「伝統芸能における『鬼』の実証的研究」（4年計画）の第3年次にあたり、資料収集、記録作成、実地調査を行い、研究会を開催した。また一般研究「能楽の芸能学的調査研究」は、その第5年次にあたり、成果を「芸能の科学」23などで公表した。

演劇研究室

日本古典演劇について芸能学的に調査・研究を行い、また、これら諸芸能の周辺にあって、伝統芸能の成立に深い関係をもつ諸分野についても調査研究を進めている。

平成6年度は、個人研究として「元禄期の浄瑠璃・歌舞伎の研究」「中国演劇の研究」、共同研究として「能楽の芸能学的調査研究」を行い、また共同研究「伝統芸能における『鬼』の実証的研究」に参加した。

音楽舞踊研究室

日本の音楽について、芸能学的・音楽学的な調査研究を行い、これら伝統音楽の成立に深い関係をもつ周辺分野についても、調査研究を進めている。

平成6年度は、個人研究として、「日本音楽の伝承における研究」「伝統的唱歌の研究」「能における宗教儀礼摂取の研究」を行ったほか、共同研究「能楽の芸能学的調査研究」「伝統芸能における『鬼』の実証的研究」に参加し、

新たに共同研究「『翁』の技法集成」を開始した。

民俗芸能研究室

全国各地に分布伝承される民俗芸能を対象とし、それらの保存・継承に資するために必要な研究を行っている。

平成6年度は、個人研究として「芸能に用いられる武器の研究」「民俗芸能における水とメンタリティの研究」を行ったほか、共同研究「能楽の芸能学的調査研究」「伝統芸能における『鬼』の実証的研究」に参加した。

(2) 各 論

1. 伝統芸能における「鬼」の実証的研究（4年計画の第3年次）

日本の民俗行事や宗教行事、能・狂言・歌舞伎などの伝統芸能には、「鬼」がいろいろに形や性格を変えて登場する。本研究は、「鬼」の多面的な性格、芸能的表現の多様性、歴史的変遷を総合的に把握し、解明することを目的とする。本年度はその3年次で、下記の調査・研究を行った。

- (1) 研究会開催；毎月1回実施した。そのうち2回は椎葉民俗芸能博物館 建設準備室主任学芸員の永松敦氏、および折から来日中の中国の演出家・蘇彦碩氏を招いて講話を聞き、質疑応答を行った。
- (2) 実地調査；奈良県五條市念仏寺の鬼走り、福井県今立郡池田町水海の田楽能舞を調査し、記録した。

2. 能楽の芸能学的調査研究（5年計画の第5年次）

舞台芸術としての能楽の技法を多角的に捉えることを目的とし、芸能部全員で取り組む総合研究である。今年度は下記の調査研究を行い、成果を「芸能の科学」23などで公表した。

- (1) 能・狂言の技法・演出；狂言の舞事の中、〔楽〕〔神楽〕〔羯鼓〕の用法について、個々の演目の演出史を検討し、能とは様相を異にしながらも、これらの狂言に囃子事（舞事）が用いられる必然性を証明した。〈羽田〉
- (2) 近世邦楽に及ぼした影響；地歌の詞章に見られる能詞章摂取の様相をさぐり、摂取した演目、部分、方法などについて考察した。〈蒲生〉

調査研究

(3) 能の鼓胴の研究；科学研究費の交付を受けて行っている「雅楽古楽器の総合的調査研究」において、能の大鼓に酷似した鼓胴を他の分担者とともに調査し、絵画資料や文献を参照しながら能の鼓胴（大鼓）の派生過程について考察した。〈高桑〉

(4) 近世演劇と能の関係；江戸歌舞伎の能撰取の様相を、初代市川団十郎を中心に調査した。〈鎌倉〉

(5) 民俗芸能にみる狂言様式の研究；狂言の「児流鑄馬」に関連して、中世から近世の地方郷村の祭礼における流鑄馬の意義について考察した。〈中村〉

3. 元禄期の浄瑠璃・歌舞伎の研究（6年計画の第1年次）

元禄期の上方歌舞伎の趣向について、能を撰取した場を調査した。〈鎌倉〉

4. 「翁」の技法集成（3年計画の第1年次）

本年度は、シテ方五流のうち、宝生・金春・金剛・喜多四流の翁（おきな）と千歳（せんざい）の型付ケを収集し、あわせて実技者の型を撮影収録するとともに技法に関する聞き取り調査を行った。なお、観世流については公開された型付ケがあるので、当面はそれと今回収集した型付ケとの比較分析を行う。〈羽田・高桑・石井〉

5. 日本音楽の伝承に関する研究（3年計画の第1年次）

地歌の詞章に見られる能詞章撰取の様相をさぐり、撰取した演目、部分、方法などについて考察した。また『教訓抄』語彙索引作成を継続し、「書名編」を完成した。〈蒲生〉

6. 伝統的唱歌の研究（3年計画の第2年次）

室町末期から江戸初期に書かれた能の伝書や楽譜の唱歌を解読し、謡を謡う際打っていた扇拍子のリズムの変遷をたどり、拍子に対する意識の変化について考察した。〈高桑〉

7. 雅楽古楽器の総合的調査研究

伝存する雅楽古楽器、とくに鼓胴について、総合的な調査研究を行い、報告書を刊行した。美術工芸史の専攻者を含む15名の共同研究で、科学研究費の交付を受けて実施する総合研究(A)であるが、研究代表者と分担者の1名は、当芸能部員である。〈蒲生・高桑〉

8. 芸能に用いられる武器の研究 (3年計画の第2年次)

弓矢について調査、研究を行い、とくに中央の祭礼における流鏝馬の歴史の変遷と地方の祭礼における稚児流鏝馬の意義について考察した。〈中村〉

9. 中国演劇の研究

古典演劇、〈昆曲〉〈京劇〉〈川劇〉に共通する作品を取り上げ、台本の相違を調査して、それぞれの演劇の特色を考察した。〈細井〉

10. 能における宗教儀礼摂取の研究

番外曲「家持」「泣不動」を中心に、陰陽道・修験道が能の風流的素材として受容されたケースを考察した。〈石井〉

11. 民俗芸能にみる水とメンタリティーの関係の研究

筑後川流域の河童にまつわる民俗芸能をとりあげ、由来記と説話に表われる河童の様相を比較考察した。〈山本〉

3. 保存科学部

(1) 概 要

文化財の材質・構造・技法および劣化機構の科学的研究ならびに文化財のおかれている保存環境の科学的研究を行い、これらを基礎として文化財保存技術開発に関する研究を行っている。言い換えれば、文化財の自然科学的研究、文化財を資料とする科学技術史的研究、文化財保存のための科学技術の応用研究の3方面である。研究組織は化学研究室、物理研究室、生物研究室の三室からなり、研究成果は修復技術部と共同編集の機関誌「保存科学」などに公表され、文化財の指定・保存対策・修復処置の基礎資料として役立てられている。

化学研究室

化学研究室では文化財の材質ならびに保存環境に関する問題点を化学的手

調査研究

法を用いて調査・研究している。X線分析法、質量分析法などを用い、主として金属文化財に関する劣化、保存対策、材料産地の推定などの研究を進めている。また、文化財を取り巻く環境からの大気汚染、酸性雨などの影響について汚染度の測定、影響評価法の研究を行っている。

物理研究室

物理研究室では文化財の材質ならびに保存環境に関する問題点を物理的手法を用いて調査・研究している。文化財の材質、構造の調査方法としてγ線・X線・赤外線などを用いている。また展示、取蔵、梱包などの文化財を保存する環境の評価と劣化防止の方法について研究を行っている。

生物研究室

生物研究室では文化財の保存に関する問題点を生物学的な見地から調査・研究している。文化財の生物による劣化、すなわち微生物や昆虫などによる被害の実態を調査して、これらの加害生物がおよぼす劣化の原因と機構を明らかにし、加害生物の防除法の研究と開発を行っている。

(2) 各 論

1. 文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究（5年計画の第4年次；修復技術部と共同）

(1) 気象および酸性雨などの観測と影響評価法の研究

鎌倉市内4地区において観測と調査を引き続き行っている。また、奈良市東大寺においても新たに観測と調査を開始した。測定項目は温湿度・日照・風向・風速・雨量・雨水・ミストおよび大気中の酸性汚染物質などで、影響評価には大理石とブロンズのテストピースを用いている。

〈門倉〉

2. 文化財施設内における保存展示条件の検討（8年計画の第6年次）

今年度の研究として、室内外における空気汚染物質に関する検討および新設館の保存環境に関する調査項目の整理を目的とした。

(1) 空気汚染物質に関する検討

1) 室内に発生源がある場合

展示・収蔵資料に温湿度変動を与えないように、極度に換気効率を落とした収蔵庫等ではわずかな汚染物質でも室内に長く滞留し、資料へ被害を与える。今年度は特にベニヤ合板から供給されるホルムアルデヒドと段ボールなどのりから発生する酢酸ビニルなど、直接・間接的に収蔵庫を酸性環境に汚染する物質について検討を行った。今年度は定性的な検出にとどまったが、今後、遠隔に調査地がある場合の簡易定量法やその除去法などの検討を要する。また、内装工事や特に工事後や通常の運営中に持ち込まれる収納棚や収納箱などの材料に注意することが必要であることがわかった。

2) 屋外に発生源がある場合

静置型 NO_x モニター（暴露期間：1日）を用い、館内外の NO_x 濃度の分布を調査した。対象施設は以下の通りである。

- ①臨海部に存在し、交通量の大きな地区にある新設美術館（機械空調あり、搬出入口付近～館内）
- ②都市部の交通量の大きな地区にある、資料保存倉庫（機械空調あり、搬出入口付近～館内）
- ③郊外の土蔵を改良した資料館、機械空調なし（観客入口～展示室）
- ④郊外（都内）の開放型の展示施設（機械空調なし、観客入口～展示室、観客多数）

検討の結果、特に搬入口には換気設備が必要であること、展示室入口の風除室を有効に活用することが重要であることが明らかとなった。

(2) 新設館の保存環境に関する調査項目の整理

平成5年度の調査結果についての解析を行った。特に、データの完備した環境調査報告書送付館21館について検討したところ、延べ床面積の大きな施設ほど時間をかけて調査し適宜環境改善を図っていること、また、アルカリ性物質の放出が落ちつくまでには、床面積によらずにコンクリート打設終了から約20カ月、すなわち「二夏」を要していることが

調査研究

明らかとなった。〈三浦・佐野〉

3. 有機質文化財の光による劣化の定量的評価法の確立（6年計画の第6年次）

今年度の研究として、絹の保存環境の見直しと絹の保存修復時期の検討法の開発についての研究を行った。

昨年度までは主として修復工場の現場での劣化促進試験を行ったが、修理に使用できる状態になるまでに要する劣化時間が、試験ごとに異なる問題があった。そのため温湿度測定用データロガーを用いて、照射実験中の環境条件を詳細に検討した。冬期は下方で夜間の結露・高湿度環境となっており、照射中の昼間でも比較的湿度は低かった。これに対して、夏期の劣化実験中は非点灯時の夜間も温度が下がらず、上方での温度は点灯中に80℃超、湿度も比較的高い状態であり、実験中に絹が「練れた」状態になっていることが明らかとなった。比較のため、恒温恒湿室内で、同じ劣化促進装置による照射実験を行った。連続照射と昼間のみ断続的な照射を行った。恒温恒湿の安定した条件下での劣化促進では、前記の通常室内での劣化促進に比べて劣化が遅いことが明らかとなった。

劣化が目に見えて現れる条件として、強度の低下、表面顔料層等の亀裂、変色等がある。本研究では、この6年の研究期間の中で、特に全面的に強度が低下する形での劣化とesrで検出される有機ラジカルのシグナル量との相関について明らかにした。また、将来にわたってラジカルは劣化の始点となることから、将来起り得る劣化についても推定できる可能性があること等を解明できた。しかし、その他の劣化パターンについては、直接結びついた科学的情報を得るには至らず、今後の課題として残った。また、真の意味での非破壊での劣化の定量についても、長期の課題として検討を続ける予定である。

平成元年度～2年度に測定方法の確立を行い、3年度～6年度に劣化の定量的評価法について検討し、実資料に関しては、染料や媒染剤の影響が大きく、単一の定量法の適用は困難であることが、これまでの研究で明らかとなった。しかし、esr法で得られる信号の質や量、また化学発光量が劣化度と相関関係を持つこと、湿度が劣化の進行に大きな影響を与えること

など、6年にわたる研究の中で大きな成果が得られた。〈佐野〉

4. 新しい文化財防虫防霉法の研究（7年計画の第1年次）

(1) 燻蒸および防虫防霉法に関する現状調査

昨年と同様、保存担当学芸員研修において、全国の美術館、博物館、資料館の学芸員を対象に燻蒸方法に関するアンケート調査を実施した。その結果、1～2週間程度の処理期間でも対応できると考えた担当者が、当初こちらが予想していた以上にいることがわかり、低酸素濃度殺虫法も導入されうる余地があることがわかった。また、極めて例外的ではあるが、燻蒸剤によって処理した材質に悪臭等の被害を経験した例もあることから、年1回の定期的燻蒸が必要かどうかもある時期にきているといえる。定期的な清掃と生物被害の点検作業を行うことで、燻蒸の頻度を減らせる可能性があることなど、学芸員研修などを通して知らせていく必要がある。〈木川〉

(2) 新しい虫害防除法に関する基礎研究

文化財の燻蒸ガスとして長らく使用されてきたエキボン（臭化メチルと酸化エチレンの混合ガス）が、ハロンの使用撤廃のために、数年内に使用できなくなるため、代替策の導入が緊急の課題である。その一環として、欧米で検討され始めた低酸素濃度殺虫法が、実際の防除法として使えるかどうか、コクゾウ虫や日本の主な文化財害虫について基礎実験を進めている。虫の種類によっては、かなり短期間に効果が認められ、有望であることがわかった。しかし、長期間を要する虫もあり、期間を短縮するための実験を行っている。〈木川〉

5. 文化財の材質・構造・技法に関する研究

(1) 鉛同位体比を利用した銅製品、青銅製品の材料産地推定

文化庁、東京国立博物館、県や市町村の教育委員会・発掘事務所・埋蔵文化財センターなどが所有する約200点の銅製品、発掘品などに関して鉛同位体比の測定を行った。〈平尾〉

(2) 蛍光X線分析法を利用した研究

文化庁、東京国立博物館、県や市町村の教育委員会・発掘事務所・埋蔵文化財センターなどが所有する約150点の銅製品、発掘品などに関して

調査研究

蛍光 X 線分析法による化学組成の測定を行った。〈平尾〉

(3) X 線回折法を利用した研究

文化庁および島根県の教育委員会から、平成5年度から6年度にかけて、荒神谷遺跡出土青銅製遺物に発生している錆の結晶組成測定依頼を受け、約400点を測定した。殆どが孔雀石(マラカイト)であるが、少量の資料に関しては藍銅鉱(アズライト)、白鉛鉱(セルーサイト)が検出された。〈平尾〉

(4) ICP 発光分光分析法を利用した研究

文化庁および島根県の教育委員会から、平成5年度から6年度にかけて荒神谷遺跡出土青銅製遺物について、内部金属の化学組成を測定する依頼を受けた。今年度は銅剣50本、銅鐸3種、銅矛16本について測定した。〈平尾〉

(5) X 線マイクロアナライザーを利用した研究

島根県の古墳の彩色壁画の顔料の材質をエネルギー分散型 X 線マイクロアナライザーで調査したところ、赤色粘土の使用とわかった。〈佐野〉

(6) 赤外線、エミシオグラフィおよび X 線透視撮影による調査

下記の作品の X 線透視撮影と調査を行った。〈三浦〉

	作品名	所蔵者(依頼者)
彫刻	天部座像	森田一善堂蔵(文化庁)
	金銅観音菩薩像	法隆寺
	明王座像	個人蔵(文化庁)
工芸品	人形	個人蔵(国立科学博物館)

6. 材質の劣化に関する調査研究

(1) 絵画

ある県立美術館において、気密性の高い展示ケース中に展示している近代日本画の画面上に生じた黒変の発生原因について調査した。温湿度等環境条件は特に問題なく、特にめだつた空気汚染因子も検出されなかった。特定の色にのみ発生する傾向があり、原因を調査中である。

〈佐野・三浦〉

(2) その他

東京国立博物館所蔵のエジプト出土のミイラの保存状態の調査を行った。棺全体にかかっている黒い皮膜の厚みは薄く、また表層部のみ黒いことが明らかとなり、経年変化で黒変して棺の表面が読めなくなったものと推定された。原因とその材質、除去法については検討中である。またカビの調査を行った結果、いずれの試料からも生菌は検出されなかった。カビのようにみえた頭部の試料を拡大観察すると、結晶状の物質であることが判明した。〈三浦・佐野・木川・川野邊〉

7. 環境に関する調査研究

(1) 温度・湿度・水分

次の地点で、温度・湿度などの気象観測を継続して行っている。〈三浦〉

史跡等の名称	観測項目	観測開始時期
小高町薬師堂石仏	温湿度・表面温度	1985年12月
中尊寺金色堂	温湿度・変位・含水率	1986年3月
鎌倉市内4地点 (高德院大仏等)	温湿度・表面温度・日照 風向・風速	1992年12月

(2) 収蔵環境に関する研究

法隆寺焼損金堂壁画の特別公開（平成6年11月1日～23日）に伴い、収蔵庫内の環境条件の計測を行った。現在の収蔵庫の湿度調整能力が比較的高いため、公開前の状況と同じ条件になることを目指して、公開中も適切な換気等の処置をほどこした。温湿度等、気象観測は継続中である。

また会期中、収蔵庫内に1日約500名ずつ、計約1万名の見学者が入室したことから、会期終了後、糸状菌（カビ）の調査を実施した。現在活動中のカビの集落は見あたらなかったが、壁画周縁部のいくつかの観測点から生菌の胞子が検出された。生きたカビの胞子が検出されたのは、各展示室の入口部で観覧者の流れが停滞していた箇所、および小壁の壁画周縁部の埃の試料であった。現在、直ちに問題になることはないが、気候が暖かくなるとカビが活動する可能性も高くなるので、経過を観察する必要がある。また、埃はカビなどの胞子が付着して増殖しやすい環境になるため、適当な方法で除去することを勧めた。これらの調査結果

調査研究

については、「保存科学」第34号に報告した。〈三浦・佐野・木川〉

(3) 古墳内環境に関する研究

1) 虎塚古墳保存環境に関する調査研究

前年度に引き続き壁画古墳の公開に伴う石室壁画の点検、計器類の調整を行った。本年度の公開は春期が平成5年3月30日から4月11日までの内の8日間および秋期の10月28日から11月7日までの間の8日間、計16日間行われた。見学者は春期は約2,500人、秋期が2,000人であったが、公開期間中石室内の温湿度にほとんど変化は認められなかった。〈門倉〉

2) 久里双水古墳発掘時の内部環境調査

佐賀県唐津市久里双水古墳発掘に伴い未開口石室内の温湿度の測定および石室内部調査後の閉塞における保存科学上の処置を行った。すなわち、発掘前の測定では外気の二酸化炭素濃度、温度、湿度がそれぞれ0.035%、22℃、50%RHであるのに対し、石室内のそれは0.52%、17℃、99%であった。石室開口時は特に温湿度に関して石室内の数値を維持するように指示した。調査終了後の埋め戻しには、後内部に通じる殺菌処置したパイプを埋設し、閉塞後も内部の状況が観測できるようにした。〈門倉〉

3) 高松塚古墳内の糸状菌のモニタリング

本年度も高松塚古墳の定期点検の一環として糸状菌の調査を行った。目視では壁画面に特に被害はみられなかったが、観測定点の抜き取り検査の結果、*Penicillium* sp., *Fusarium* sp.など昨年度とほぼ同様の糸状菌相が検出され、これらが現在の常駐菌であると推測された。また、パラホルムアルデヒド燻蒸の前後で糸状菌の採取を行った結果、燻蒸ダクトから燻蒸剤が届きにくい方向にある壁面では、糸状菌胞子が生き残ることが分かった。今後有効な対処法について検討を進めたい。〈木川・増田・尾立〉

(4) 大気汚染が文化財に与える影響の研究

1) 大理石テストピースの暴露試験

前年度に引き続き環境汚染が文化財におよぼす影響について、大理

石テストピースの暴露による影響度のモニタリングを実施している。試験地域は鎌倉（4地点）、東大寺、東京国立博物館（5地点）、京都国立博物館の他に小金井市東京学芸大学（郊外）、国分寺市（郊外）、東京都環境科学研究所（準工業地）、大阪府公害センター（商業地）においても同様な手法でデータを収集し、信頼性について検討を行い継続中である。なお大理石テストピースは韓国の国立文化財研究所および湖巖美術館においても暴露実験を開始した。

現在、この手法は信頼性を確認するため同一地点で降雨、ミストおよび大気中の酸性汚染物質（ SO_2 、 NO_2 、 Cl^- 、 NO_3^- 、 SO_4^{2-} ）を測定して酸性物質濃度と大理石テストピースの重量変化量との相関性を確認している。〈門倉〉

2) 銅板テストピースの暴露試験

銅板葺き屋根板（表慶館屋根、明治43年に造られ、昭和50年に葺き替えられた）を暴露し、銅板表面を洗って流れた雨水から銅イオンを測定し、同時に採取した雨水中の Cl^- 、 NO_3^- 、 SO_4^{2-} 濃度と比較し、酸性雨が銅錆におよぼす影響と大理石テストピースの重量変化量との相関性について検討した。

9カ月間の実験でCuイオンは約30mg（100cm²当たり）が溶出し、溶出割合は降雨中の陰イオン総量と一致している。〈門倉〉

(5) 室内汚染が文化財に与える影響の研究

1) 火災時に使用する消火剤の文化財材質への影響の検討を継続している。今年度は特に、粉末消火剤や消火栓で対応する美術館等の増加を考慮し、その影響について、消防庁消防研究所等との交流を通して情報を収集した。また、認可の動きのある新消火設備に関しての検討を行っている。〈佐野・三浦〉

2) 展示施設内で使用される各種材料についての情報を収集している。今年度は特に、クロス等を貼る合成樹脂のりについて検討した。〈佐野〉

3) 環境改善のために使用可能な各種吸着剤やその使用方法について、情報収集と検討を行っている。〈佐野〉

(6) 美術館・博物館等館内環境調査

調査研究

国宝・重要文化財などの指定品および東京国立博物収蔵資料の借用展示に関して館内環境調査を行い、報告書を作成提出した。〈三浦・佐野〉

宮城	東北陶磁文化館
秋田	秋田県立近代美術館
茨城	古河歴史博物館
群馬	玉村町歴史資料館
埼玉	戸田市立郷土博物館 入間市博物館
千葉	戸定歴史館 成田山書道美術館
東京	東京美術倶楽部 目黒区立美術館 板橋区立郷土資料館 足立区立郷土博物館 静嘉堂文庫美術館
新潟	新潟県立近代美術館
富山	高岡市美術館 福岡町立歴史民俗資料館
石川	石川県輪島漆芸美術館
長野	長野県立歴史館 おふせミュージアム 真田宝物館・象山記念館 サンリツ服部美術館
愛知	愛知県陶磁資料館 春日井市道風記念館 高浜市やきもの里かわら美術館
三重	式年遷宮記念神宮美術館
京都	丹後町古代の里資料館
大阪	国立民族学博物館 孝恩寺収蔵庫

サントリーミュージアム [天保山]

奈良	市立五條文化博物館
和歌山	和歌山県立博物館
島根	島根県立埋蔵文化財センター
香川	高松市歴史資料館
福岡	八女市岩戸山歴史資料館
佐賀	佐賀県立名護屋城博物館
熊本	熊本県立美術館

現地調査は愛知県陶磁資料館，市立五條文化博物館，和歌山県立博物館，高野山霊宝館，目黒区立美術館，愛媛県立美術館，七尾市美術館，高岡市美術館，法隆寺，徳山市立美術博物館，横浜市歴史博物館，サントリーミュージアム [天保山]，サンリツ服部美術館，瑞巖寺宝物館の14館。

また，全国144館の新設既設美術館・博物館等文化財展示取蔵施設に対して環境改善に関する相談を受け，助言を行った。

岩手	萬鉄五郎記念美術館
宮城	村田町歴史みらい館 一関市教育委員会 涌谷町教育委員会 東北陶磁文化館 瑞巖寺宝物館
秋田	秋田県立近代美術館
山形	山寺芭蕉記念館 酒田市民美術館
福島	原町市野馬追の里歴史民俗資料館
茨城	古河市歴史博物館 茨城県立自然博物館 下妻市ふるさと博物館 国土地理院地図管理部 県立五浦記念美術館
栃木	ミュージアム氏家 宇都宮市教育委員会
群馬	高崎市教育委員会 西毛考古資料館 玉村町歴史資料館 富岡市美術博物館準備室 竹久夢二伊香保記念館 太田市高山彦九郎記念館 群馬県立近代美術館
埼玉	戸田市立郷土博物館 入間市郷土博物館 久喜市公文書館

調査研究

千葉	戸定歴史館 袖ヶ浦市郷土博物館 佐倉市教育委員会 流山市博物館 千漉町教育委員会 成田山書道美術館 千葉市美術館
東京	東京美術倶楽部 目黒区立美術館 国立国会図書館 真如苑 藤田トイミュージアム 江戸東京博物館たてもの 園 東京都現代美術館 日本刀装具研究所付属美術館 宮内庁三の丸尚蔵館 大倉集古館 板橋区立郷土資料館 足立区立郷土博物館 松濤美術館 一橋大学付属図書館 日本大学総合芸術情報センター 江戸川区郷土資料館 静嘉堂文庫美術館 荒川区教育委員会 相撲博物館
神奈川	相模原市立博物館準備室 横浜市立歴史博物館
新潟	新潟県立近代美術館
富山	福岡町立歴史民俗資料館 高岡市美術館
石川	石川県輪島漆芸美術館 七尾市美術館 金沢市立中村記念美術館
福井	福井県教育委員会 福井市教育委員会 武生市立美術館
山梨	榑形町春仙美術館
長野	伊那文化館 サンリツ服部美術館 長野県立歴史館 おふせミュージアム マリーローランサン美術館 真田宝物館 下諏訪町立諏訪湖博物館・島木赤彦記念館
岐阜	岐阜県立博物館 岐阜県陶磁資料館 古代歴史記念美術館
静岡	三島大社宝物館 静岡県立美術館 久能山東照宮博物館
愛知	愛知県陶磁資料館 田原町博物館 豊田市美術館 春日井市立道風記念館 高浜市やきもの里かわら美術館 岡崎市美術博物館
三重	式年遷宮記念神宮美術館 松浦武四郎記念館
滋賀	MIHO 美術館 滋賀大学経済学部附属資料館 琵琶湖博物館開設準備室

京都	勝龍寺城公園管理棟展示室 丹後町古代の里資料館 大山崎町歴史資料館 舞鶴市教育委員会 城陽市教育委員会
大阪	サントリーミュージアム [天保山] 国立民族学博物館 孝恩寺収蔵庫 大阪市立中央図書館 泉佐野市郷土博物館 貝塚市教育委員会 大阪府立近つ飛鳥博物館
兵庫	小野市立好古館 龍野市歴史文化資料館 小磯記念美術館 神戸市埋蔵文化財センター 白鶴美術館
奈良	市立五條文化博物館 松伯美術館 奈良県立美術館 法隆寺
和歌山	和歌山県立博物館 高野山霊宝館 田辺市立美術館
島根	島根県埋蔵文化財センター
岡山	成羽町美術館
広島	宮島町立歴史民俗資料館 頼山陽史跡資料館 王舎城美術 館 千代田町伝承館 甲山町歴史民俗資料館
山口	下関市教育委員会 徳山市立美術博物館 吉川報効会史料 館
徳島	徳島市立徳島城博物館 徳島県教育委員会
香川	牟礼町石の民俗資料館 香川県立歴史博物館準備室
愛媛	愛媛県立歴史文化館 愛媛県立美術館
高知	高知県立美術館
福岡	春日市生涯学習センター 石橋美術館 王塚装飾古墳館 聖福寺 太宰府市文化ふれあい館 八女市岩戸山歴史資料 館
佐賀	佐賀県立名護屋城博物館 唐津市立近代図書館 河村美術 館
長崎	ハウステンボス美術館
熊本	熊本県立美術館
大分	耶馬溪風物館
宮崎	宮崎県立美術館

調査研究

沖縄 県立芸術大学附属図書館・芸術資料館

8. 生物劣化に関する調査・研究

- (1) 出土木材の保存処理に用いられる合成樹脂（PEG）を分解するバクテリア

昨年度は、静岡県埋蔵文化財調査研究所における出土木材の PEG（ポリエチレングリコール）含浸処理中にみられる微生物被害を調査し、ある処理槽では、PEG400を分解するバクテリアが発生していることが判明した。このことより、出土木材の処置に使用される PEG の劣化には、化学的要因以外にも生物的要因が関与しているという知見が得られた。

〈木川〉

- (2) 千代田町伝承館・千手観音立像の糸状菌の調査

重要文化財、千代田町伝承館・木造千手観音立像には、修理後、たびたびカビが発生している。今回検出されたカビも、以前の調査と種類は異なるが、好乾性のカビであった。カビの発生前の取蔵庫は、湿度が80%以上になる期間が多かったので、カビの発生に好適であったと推測される。しかし、作品によってカビの発生しやすさに差がみられることから、修理工程と関連づけて対策を立てる必要があることがわかった。〈木川〉

9. その他

- (1) 採取時期により生漆の成分や活性度がどのように変化するのか等、漆の科学的研究を行っているグループの研究会に参加し、研究の進展状況等を把握した。〈佐野〉
- (2) 文化財施設の保存（収蔵展示）環境についての情報と研究の方向を探るために、美術館等の学芸員を招き研究会を催した。〈三浦〉
- (3) 国指定文化財公開のための施設設計の指針を文化庁文化財保護部として平成6年度に作成することとなり、そのための検討協力者会議に委員として参加するとともに、ワーキンググループにおける作業を行った。

〈三浦・佐野〉

4. 修復技術部

(1) 概 要

文化財の修復に関する調査研究、科学的修復方法の開発研究、応用およびその公表を主務としている。研究の対象は美術工芸品、建造物、考古資料、民俗資料等の有形文化財をはじめとした、文化財すべてを含んでいる。

組織としては、文化財を構成する主材料に合わせて三室からなっている。

第一修復技術研究室

工芸品、建造物など木材および漆を主な材質とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究を行い、その成果の公表を行っている。

第二修復技術研究室

紙と布を素材とする文化財の修復技術を研究している。

絵画・文書類の素材として、和紙、絹布、麻布、木綿布とそれらの繊維、顔料、染料、接着剤（膠、糊など）を対象とする。繊維の強度変化・変色などについての基礎的研究と、紙・布としての劣化要因探求により、修復技術開発に資する。現代の修復技術に不可欠な合成樹脂その他の新素材も、文化財修復の観点から検討する。平成元年度から始まった「在外日本美術品の修復協力」には、修復技術専門家の立場から修復全般に関わると同時に、平成4年度からは、「紙の保存修復」国際研修も担当している。

第三修復技術研究室

建造物、考古資料、美術工芸品など金属、石材、その他無機材質を主材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的研究とその成果の公表を行っている。

環境汚染物質によって無機材質で造られた文化財の劣化が進行して大きな社会問題になっているが、どんな修復保存処置が施せるのかの研究を行って

調査研究

いる。また「近代の文化遺産」の重要文化財指定が本格化するに伴って従来の修復方法では対応出来ない文化財が多くなっているため、「近代の文化遺産」の修復研究機能の充実をはかっている。

(2) 各 論

1. 文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究（保存科学部と共同）

鎌倉市に4ヶ所の観測ステーションを設置して環境汚染物質の測定を行っている。本年度は、鎌倉大仏調査の基本になる写真測量図面を作成した。また大仏に対する風の影響を調査するために風洞実験を行う予定であるが、その基礎資料を得るために風向、風速の観測を行っている。

国宝東大寺金銅八角燈籠に腐蝕が目立つために、文化庁の要請もあり、本年度から東大寺境内で環境汚染物質の観測を開始した。酸性雨測定には、初期降雨中のイオンが大きな影響を与えているのではないかとの認識から雨中のイオンを自動測定できる装置を設置して観測を開始した。〈青木、川野邊、三浦、門倉〉

2. 文化財の伝統的修復材料の研究（第2期 3年計画の第2年次）

(1) 焼付漆の研究

鉄や銅の上に漆を焼付けて箔貼りや装飾を行うことは、「延喜式」に既に記録があり、更に古墳時代の遺品の内に漆を焼付けたと思われるものもあって、古い技法であることが知られている。その伝統は現代まで続いており、主に建築金具などに応用されている。

しかし、その技法は、個人的技法として、正確性に欠ける所があるために、その効果の有効性と技法の確立を目的として実験を行った。

今年度は予備的実験として生漆、加工生漆、精製漆、ウルシオール、カシュー、化学塗料を鉄、銅に150℃、170℃、190℃で焼付け、曲げ、煮沸、引きはがしの試験を行った。

塗料、金属、焼付け温度の条件の違いによる有為な差は見出されなかった。本試験においては、その点考慮する必要がある。〈中里、青木〉

3. 文化財の材質・構造・技法に関する研究

(1) 漆文化財の技法

8世紀から塑形材として用いられる漆木屎の実証的研究として、古代に用いられた可能性のある混和剤（朽木粉、鋸屑、たぶこ等）を選び、古代漆木屎の再現を試みた。〈中里〉

京都島原の角屋にある「螺鈿の間」を調査し、江戸時代螺鈿の特殊な装飾法について知見を得た。〈中里〉

4. 材質の劣化に関する研究

(1) 巖島神社・高舞台の修復材料の検討

高舞台の漆塗り塗装の劣化速度を減少させるための塗装方法および材料の検討を行った。〈川野邊〉

(2) 紫外線による人工劣化絹の開発

補絹用の絹を紫外線を用いて人工劣化を行い、劣化条件と劣化絹の物性との相関および実際の修復材料としての評価などの研究を開始した。〈川野邊〉

(3) 装潢技術への酵素利用法の開発

装潢技術において劣化した糊の効果的な除去、修復中に用いる材料の処理などに酵素を使用するより安全・迅速な処理方法の開発を開始した。〈川野邊〉

5. 文化財修復技術

(1) 漆文化財

歴史民俗博物館所蔵のいわゆる長崎螺鈿、十六世紀輸出漆器約20点を調査した。海外における日本漆器、日本漆器模倣品の調査をドイツのケルンとドレスデンで行った。〈中里〉

(2) 金属文化財の保存修復

プラズマを使用した出土金属製品の保存処理研究は、昨年に引き続き行っている。本年度は鍍金製品上の緑青錆をレーザーでクリーニングすることが可能かどうかの実験を行った。有効な方法であるとの結果が得られたので、今後処理条件設定等の実験を積極的に行いたい。〈青木、犬竹〉

調査研究

(3) 遺跡・遺構の保存修復

- a. 岐阜県古川町杉崎廃寺(7世紀頃)の発掘遺構を整備して露出保存する計画があり、保存計画作成に必要な土壌調査や樹脂擬土耐候試験などを行った。ソイルセメントやエポキシ樹脂擬土に比べポリシロキサン樹脂を使用した擬土の方が透水性や耐久性に優れていることが判明した。〈青木、大竹〉

(4) 石造文化財の保存修復

石造文化財の外壁は、表面の層状剝離が著しいことが多い。このような場合剝離部分をシールして樹脂を注入しなければならないが、従来のシール材では壁面を注入した樹脂で汚すなど問題が多かった。膠を変成して柔軟にしたシール材を開発した。その結果壁面を汚すことなく樹脂注入施工が可能になった。シール材の膠は樹脂硬化後温水で洗い流すことによって簡単に除去することが出来る。

石のクリーニングは、化学薬品や温水洗浄などによって行われてきたが、非常に劣化した石では崩壊の危険があり、クリーニングが行えなかった。レーザを使用した場合あまりダメージを与えずにクリーニングすることが出来ることが分かったので、さらに実験を進めていく予定である。〈青木、大竹〉

6. 調査指導

(1) 正倉院伎楽面の修理

本年度は木彫第48号(崑崙)と木彫第47号(醉胡王)が修理対象となり、正倉院事務所の手で修理が行われたが、同所の依頼により、西川所長と共にこれらに対して技術的検討と指導を行った。〈中里〉

7. 受託研究

(1) 高知県兔田八幡宮所蔵銅剣の保存修復研究

シカなどの動物文様を陽鑄した細形銅剣は銅剣としては現在までにこの1例しか発見されていない貴重な遺物である。

蛍光X線分析による材質分析と鉛同位体分析を行った。材質は銅、錫、鉛を主成分とした青銅であることなどが分かった。修復についてはX線撮影後、ベンゾトリアゾール処理を行い、アクリル樹脂を減圧含浸した。

(2) 重要美術品鉄製狛犬および三十八間星兜の保存修復研究

「建治三年」(1277年)の銘文がある狛犬で、三十八間星兜とともに宇都宮市二荒山神社に伝世してきた。近年腐食が進行して、銘文が失われる危険が生じてきたので保存修復を行うことになった。

保存処理は、文化財に対して応用研究を進めてきたタンニン系防錆剤を使用して錆の安定化処理を行った。また欠失している右前足を木製で補った。

(3) 太宰府市大字観世音寺内出土の漆手箱復元に関する研究

この漆塗箱は十二世紀頃のもので、その外形から手箱と考えられ、中国製の白磁や深皿、銅鏡などが納められたまま出土した。木胎は完全に腐朽し漆膜のみが遺存し、それが土圧で押しつぶされていた。昨年度の事業は漆膜の周囲の土を除去し、箱の姿を露出する所まで行ったが、今年度は漆膜の正確な位置を記録しながら表面の二層の漆膜(蓋の外面と内面)を取り上げ、別途保存した。

この処置によって新たに墨一丁、筆と思われるもの、雲母引きの料紙の残欠と思われるものが出土した。

5. 情報資料部

(1) 概 要

情報資料部は、従来美術部資料室の行ってきた美術に関する研究資料の作成、収集、整理、保管、閲覧等の業務を充実発展させ、さらに当研究所各部所掌の研究資料に関する情報の統合化をはかることを目的とする。

当部所管の諸資料は美術部創設以来内外の研究者の利用に供され、文化財に関する研究資料センターの役割を果たしている。この機能をより充実させ、学術情報の増加と多様化に対応した所蔵研究資料の効果的利用を図るため、データの共有化を中心とする美術情報処理システムの研究、画像処理技術の応用、文献データベースの開発などを行っている。

調査研究

当部研究員は、上記業務を行うとともに日本・東洋美術史各分野で研究活動を行っている。調査研究活動の成果は「美術研究」ほか学会誌、美術部と共催の公開学術講座等で発表されている。

当部は、文献資料研究室と写真資料研究室の二室をもって構成される。

文献資料研究室

美術史関係を中心とした図書・雑誌、調査研究活動によって収集された各種研究資料の整理・保管・閲覧を行っている。また、日本・東洋古美術関係の文献目録の作成とともに文献データベースの開発を行っている。各年分の文献目録は『日本美術年鑑』に掲載し、一定期間ごとに総合・増補し『日本・東洋古美術文献目録』として刊行している。現在、昭和41年～60年分について編纂作業をすすめている。

写真資料研究室

研究用写真資料の作成、収集、整理、保管、閲覧を行うとともに、各研究者の調査研究活動に協力して研究資料を撮影し、資料の充実につとめている。また、これに併行して、美術史研究へのデジタル画像処理技術の応用及び、美術研究所創立以来蓄積してきた写真原板のデータベース化に関する研究を行っている。

(2) 各 論

1. 美術情報処理システムの研究—データの共有化を中心として—(10年計画の第6年次)

(1) 共有データの生産・蓄積

1) 文献・図書データ

定期刊行物所載文献・所蔵図書データの入力を継続した。

2) 美術史研究資料

当研究所および東京国立博物館・東京芸術大学所蔵の「売立目録」のデータ化を行なった。その成果は『美術研究』第360・361号に公開

した。

3) 画像データ

アナログ画像約4,000件を入力し、あわせて写真資料関連文字データのを継続した。

(2) パイロットシステムの構築

1) 定期刊行物所載文献データベース及び所蔵図書データベース検索システムの運用・評価

日常的に順調に稼働中。

2) 画像データベース構築のための基礎実験

PHOTO-CDを中心に、デジタル画像の入力方法、画質、容量等について、諸条件を検討した。

3) ローカルエリアネットワークシステムの整備・運用・評価

ソフトウェアのバージョンアップ、メモリーの増設をおこない、システムの高度化を図った。

4) 検索辞書システムの研究

基礎的な諸条件について調査・検討した。

(3) 「共有化」環境の検討

1) 「共有化」環境をめぐる諸問題についての研究会の開催

特別研究「有形・無形文化財データベースシステムの構築に関する研究」の一環として、関連する研究分野の研究者を招聘し協議を行なった。協議の内容は以下の通り。

1. 「『隔葉記』全文データベース構築の諸問題」(12/5~12/9)

2. 「明治期美術展出品目録データベース作成に関する協議」(2/8~2/10, 2/12~2/17)

2) 文化庁を中心とする文化財情報ネットワークシステムへの対応

LANの拡充を図り、所内システムの環境を整備した。

3) オフラインによるデータ共有システムの拡充

「共有化」環境をめぐる研究会の開催のほか、当部の作成したデータベースについて、その運用評価を各モニター機関に依頼した。

4) オンラインデータ通信の有効利用

調査研究

学術情報センター・国文学研究資料館の雑誌記事索引データベースを利用し、将来のデータベース公開に向けた諸条件を検討し、またインターネット参入に向けた準備を開始した。

2. 美術史研究における語彙の研究(検索辞書システムの研究)(5年計画の第1年次)

(1) 既存検索システムの調査

- 1) 学術情報センター、国文学研究資料センターの文献検索データベースの利用を通して検索システムの検討を行った。これらの検索用語彙は図書館の件名索引に近似し、一般的語彙からさらに深い語彙レベルへの道は用意されていない。
- 2) これに対して新聞記事データベースの場合は記事全文を対象として検索語彙が生成されるシステムであり、かなり汎用性の高いものとなっているようである。

(2) 語彙の収集

- 1) 既に作成してしている古美術研究文献データベースの各データに付されたキーワード(複数)を切り取り、サンプル用の美術語彙データベースを作成した。
- 2) また全文データベースから主要語彙を切り取り同じように語彙データベースを作成した。

(3) 収集語彙の特性分析と辞書機能の検討

- 1) 当部における既存データベースの領域は古美術から近代現代美術にいたるまで広範囲にわたる。
- 2) サンプルとして抽出した語彙は主として古美術研究文献から採られたものである。これらの語彙の特性は人名、作品名(主題名)、技術用語など典拠管理が可能なのが圧倒的に多数をしめている。それに対して典拠管理の困難な概念語は意外に少ない。これらの語彙特性をふまえることによって広がりをもたない閉じられたデータベースを対象とした検索語彙辞書を作成することは比較的容易であろうという感触は得られた。ただし近代現代美術を対象とした語彙の収集分析は本年はおこなっていない。

- 3) データベースと辞書の関係づけについては上記特性のさらなる分析、語彙収集範囲の拡大を目指す必要があるが、本年度は1語彙と1文献の対応をとった検索システムをLAN上で利用できるような環境を整えた。

3. デジタル画像データの蓄積と活用に関する基礎的研究(5年計画の第1年次)

(1) アナログ画像

科学研究費データベース刊行費による「有形文化財データベース」(代表者:高見沢明雄)により、前年度に引き続き、所蔵ガラス原板(キャビネ判)をアナログ画像データとしてレーザーディスクに記録し、データベース化した。今年度は4,000コマの入力を行なった。

(2) デジタル画像の記憶媒体

コンパクト・ディスクを中心に考えると、現在検討できる標準的な形式には、①フォトCD方式(コダック社開発)と②TIFFなどのビットマップ方式があり、また記憶容量を節約する、③J-PEG等の画像圧縮の方式が検討対象となる。

①についてはテスト・データを作成し、②については既成のCDを用い、精度・容量・再生速度などの点から比較検討を行ないながら、将来の画像データ・ベースを念頭においた場合に予測される問題点を検討した。

(3) ハード・ウェア

現有の汎用コンピュータ(マッキントッシュ・クワドラ)にメモリーとハードディスク(1GB)を増設して性能の向上をはかり、次年度の実験に備えた。

4. 日本武装史研究

刀剣・甲冑・馬具・弓箭具などの武装研究は、有職故実と作品研究が別々に行われているが、これを作品・故実・文献資料をあわせて行うものである。本年は巖島神社所蔵の鎌倉将軍から寄進の刀剣および文書の調査を行った。今後は絵画資料の収集も含めてすすめていく。(廣井)

5. 古代仏教彫刻史研究

調査研究

平安時代初期木彫像研究を継続し、大阪獅子窟寺薬師如来坐像、東大寺八角灯籠他、関連諸作品を調査するとともに、史料の収集・検討を通して、彫像の表現と機能の問題を、古代的空間意識、堂内空間、儀礼などが構成する「場」との関わりの中で考察した。その成果は、「平安初期彫像の基礎的問題—彫像の「場」をめぐる」として、『科学研究費一般研究(A)「東アジア美術における人のかたち」報告書』において発表した。〈長岡〉

6. 鎌倉時代絵画史の研究

肖像画と伝記絵の調査を継続した。伝記絵は当麻奥院蔵「法然上人伝絵」全巻の調査を行った。当本は知恩院本の副本とされ図もほとんど同一とする解説が多いためか調査の手が及んでいないが、実際には相違する部分もあり、制作時期も改めて検討されなければならないなど問題を抱えている作品であることが判明した。法然伝絵の成立の話題同様、知恩院本でたかまりをみせ、伝絵が流布する様態を考える上で貴重な資料である。

肖像画については鎌倉期の作品はもとより、後代に至るまでの作品を調査しえたが、対象とした像主も武将から神像まで多様であった。これらの調査を通じて得た知見や課題のいくつかをあげれば(1)東帯姿の俗人画像群からは、かたちの規範性やその広がり的问题、さらには人と神のはざまをも見すえる必要があること。(2)「釈奠図」(岩瀬文庫)や仏教儀礼指図の検討からは肖像画の儀礼空間をさらに究明する必要があること(上述の人の物語の形成と定着の問題や、画像の機能の問題へと広がる)。(3)中世期肖像画の痕跡を留める近世期の肖像画摸本類の調査からは、継承されるかたちとともに、後代に形成された新たな文脈で付加され、変容する姿かたちの問題があること。(4)いわゆる「やまと絵」系の画像と大陸からの画像やその影響下に成った画像の比較検討からは、後者の流入とそのあとづけ、そしてわが国において受入れられた要素とすてさられた要素の分析、さらに画像制作の実態の比較検討がさらに必要なこと。(5)肖像画の名づけの検討からは、特定の画像が歴史社会的な文脈の中で忘却され、または浮上してゆく局面が存在すること、などであろうか。

前年度同様、調査研究の過程で収録した資料記録はできるかぎりデータ化し、研究資料の共有化への準備を進めている。〈米倉〉

7. 請来仏画研究

高麗仏画の調査を継続し、基礎データの収集と写真撮影を行った（日本銀行「至元23年銘阿弥陀如来図」、滋賀・石馬寺「釈迦如来図」、愛知・隣松寺「観経十六観变相図」、愛知・養寿寺「楊柳観音図」、同「地藏菩薩図」、愛知・大恩寺「観経变相図」等）。また高麗の阿弥陀画像と華嚴思想の関係について考察し、その成果を口頭発表するとともに『美術研究』362号誌上にまとめた。〈井手〉

8. 中国における石窟美術の研究

中国の河北省・河南省・甘粛省の石窟寺院をたずね、阿弥陀図像を中心に調査を行った。その研究対象は壁画を主としたが、彫塑についても考察の範囲に加えた。

敦煌国際学術シンポジウムや日中共同研究「敦煌文化財の保存修復に関する調査研究」を通じて、敦煌莫高窟の壁画に対する調査をすすめた。初唐・盛唐期における阿弥陀浄土変相や観経变相の図像研究を継続し、とくに観経变相中の日想観図にみえる山水表現について、阿弥陀浄土思想および中国における山水観の両側面から考察を加えた。

河北省元氏県の封龍山石窟、邯鄲の南響堂山石窟・北響堂山石窟、河南省安陽県の小南海石窟・靈泉寺石窟、林県の洪谷寺石窟、滄県の千仏寺石窟など、いずれも中原地方、すなわち中国の中央部に位置し、かつ南北朝後期から隋・初唐期にかけてつくられた石窟寺院を対象に、フィールドワークを行った。とくに北齊期につくられた小南海石窟中窟西壁の九品往生図浮彫について、阿弥陀浄土変相の初期的展開という視点から調査研究を継続した。〈勝木〉

6. 国際文化財保存修復協力室

(1) 概要

人類共通の遺産である文化財の保護のためには、国際的に交流や協力をは

調査研究

かることが必要である。そのためには、各国の実状についての理解が重要で、情報の収集が大切である。また、国際協力として最も大切なことは人材の養成で、研修事業がきわめて重要である。文化財保存修復技術の向上のための研究を推進して行くための国際共同研究も重要な事業である。そこで、国際貢献の一環として、わが国に文化財の保存、修復に関わる情報、研修、研究の国際協力センターを設立すべきとの声が高まっている。

国際文化財保存修復協力室は、センター設立に向けて、従来のアジア文化財保存研究室を拡充し平成5年4月に発足した。現在、協力室では世界各国、各地域の文化財とその保存に関する資料の収集、整理、データベースの作成を行っており、また、国際共同研究、国際会議・セミナーの企画、実行や諸外国の専門家の研修に関する仕事を行っている。さらに、基礎研究として、屋外の石造および木造文化財の劣化と保存処置に関する研究等を行っている。

(2) 各 論

1. 世界、特にアジア諸国における文化財保存に関する情報の収集（5年計画の第4年次）

(1) 文化財の劣化状態および保存対策についての調査

- 1) アジア文化財保存セミナーにおいてカントリーレポートを行ったアジア各国の代表に、各国の最も代表的な文化財について、その保存状況と保存対策についてのアンケート調査を行い、多くの情報を得た。昨年度（第4回）までに得られた情報について項目別に整理、解析し、レポートにまとめた。〈西浦〉
- 2) 国内・外で開かれた国際的な会議、講演会、研究会等に積極的に参加し、多くの情報を得た。〈西浦、松本、朽津〉

(2) 組織、機構、プロジェクト等についての調査

- 1) アジア文化財保存セミナーにおいてカントリーレポートを行ったアジア各国の代表に、各国の文化財の保存に関わる組織、機構、プロジェクト等について、その現状と課題についてのアンケート調査を行い、

多くの情報を得た。昨年度（第4回）までに得られた情報について項目別に整理、解析し、レポートにまとめた。〈西浦〉

2) 東京国立文化財研究所を訪れた諸外国の文化財保存関係者から個別に各国の状況を聞き取り、資料とした。〈西浦、松本、朽津〉

3) 文化財の保存、修復に関わる人材について情報を収集し、データベースを作成中である。〈西浦〉

4) 国内・外で開かれた国際的な会議、講演会、研究会等に積極的に参加し、多くの情報を得た。〈西浦、松本、朽津〉

(3) 保存担当者リストの作成

1) 世界、特にアジア諸国の文化財保存担当者の国別リストを作成すべく、情報の収集に努めている。この場合、単に人名を網羅するものでなく、実際に役立つ内容のあるリストにすべく、データベース化について検討している。〈西浦、松本、朽津〉

2) 国内の文化財保存に関わる人材のリストを作成している。この場合も単なるリストでなく、利用価値の高いデータベースとするために、その整理方法等を検討中である。〈西浦、松本、朽津〉

2. 屋外石造文化財の劣化と保存修復処置に関する研究（5年計画の第4年次）

(1) 石材の劣化現象についての岩石学、鉱物学的調査研究

1) ブリュッセル市庁舎において、石像の劣化を観察した。その結果、この石像は砂質石灰岩でできており、方解石の部分が選択的に溶解するために石材が脆弱化し、崩落が起きていることが判明した。〈朽津〉

2) ベルギー・トンゲレン教会の修復に使用される予定の石材と、もとの教会の石材とを岩石学的に分析、比較検討し、もとの石材と異なる性質のものを識別・分離して、もとの石材と同じ性質のもののみを用いるよう提言した。〈朽津〉

3) ヴェルサイユ宮殿など、パリ近郊にある石灰岩または大理石製の歴史的建造物において、その石材を岩石学的に観察した結果、使用されている石灰岩・大理石にも多数の種類があり、異なる産地から石材が持ち込まれていることが判明した。〈朽津〉

調査研究

- 4) 細かい結晶粒子を吹き付けることによって、建造物等の石材をクリーニングする方法の有効性について、走査型電子顕微鏡等を用いて評価を行った。その結果、クリーニング法としては極めて有効であるものの、一部の粗粒石材に対しては、石材自体にまでダメージを与える恐れがあることが判明した。〈西浦〉
- (2) 石材の保存材料に関する調査研究
 - 1) 石材の強化および撥水処理に用いられる代表的なシリコン樹脂について、その物性を比較検討するための実験を行っている。凝灰岩、砂岩、安山岩試験片を用いた浸透生測定、石粒を用いた強化力評価実験、処理石材の水蒸気透過性試験を行っており、特に、ヨーロッパで広く用いられているエチルシリケート系強化剤である Wacker OH と日本で多く用いられているメチルトリエトキシシラン系撥水強化剤である SS-101 との比較を行っている。〈西浦〉
 - 2) 大阪市立美術館所蔵の石灰岩製コプト石彫及び下関市立美術館所蔵のエジプト出土石灰岩レリーフが、収蔵中に塩の析出によって表面層が粉状に崩れていく現象が観察された。調査したところ析出塩は NaCl であった。これは、地下埋蔵中に吸収した塩が発掘後徐々に空気中の水分を吸着して潮解し、表面層に移動して再結晶したものと考察された。石灰岩レリーフについては以前に水による塩抜きをしたことがあり、それにより却って結晶の析出が促進された経緯がある。これらの石彫は板状のものであり、石の内部まで完全に樹脂含浸が可能であることが確認されたので、全体をシラン樹脂で固め、塩を封じ込めるとともに全体を強化する処置を行った。〈西浦〉
 - 3) 神奈川県、重文・元箱根石仏群の保存修復に関して、岩石の含浸強化処置、撥水処置について、適当な材料の選択試験の調査指導を行っている。〈西浦〉
 - (3) 洞窟、磨崖仏などの劣化現象と保存対策に関する調査研究
 - 1) 福島県小高町、史跡・薬師堂石仏の劣化状態を定期的に調査しており、大屋根架設後の岩体の乾燥に伴う状態変化について、保存処置法を踏まえつつ、調査を継続している。〈西浦〉

- 2) 大分県の石造文化財調査に顧問として参加し、調査マニュアルの作成を行った。〈西浦〉
- 3) ラスコール洞窟をはじめとするフランス南西部の洞窟遺跡を訪れ、壁画の劣化状況等について調査を行った。〈朽津〉

3. 文化財の保存を目的としたレンガの劣化現象と保存対策に関する調査研究（5年計画の1年次）

- 1) 札幌市の重要文化財・北海道庁旧本庁舎において、レンガの劣化状況を観察した。その結果、同庁舎では、雨が直接的に当たるバルコニーの部分で雨水の影響による塩類風化や生物劣化が起きていることがわかった。〈朽津〉
- 2) 小樽市のレンガ造文化財を観察した結果、環境汚染とは直接関係ないと思われるものの、雨水の影響でレンガがかなり劣化していることがわかった。〈朽津〉
- 3) タイの代表的なレンガ造遺跡において、環境計測システムを設置して、環境計測を開始した。〈西浦・三浦・松本・朽津〉
- 4) ブルージュ救世主大聖堂において、レンガの劣化現象を観察した結果、ここではもともと方解石を含んだ特殊なレンガが使われており、それが雨水等と反応することによって石膏を形成し、レンガの劣化を生んでいることが判明した。〈朽津〉

4. 文化財の保存修復技術に関する国際共同研究—文化財の保存修復に用いられる新材料〈1〉合成樹脂—（9年計画の1年次）

- 1) タイ国において、建造物・遺跡等に用いられている合成樹脂についての調査を、タイ国芸術局と共同で行った。〈西浦・松本・朽津〉
- 2) タイなど東南アジア諸国で、屋内に収蔵されている美術品等の修復に用いられている合成樹脂についての調査を、タイ国立博物館と共同で行った。〈西浦・松本・朽津〉
- 3) 木造古建築の外装塗装としての丹塗りへの合成樹脂の応用について、その耐久性の面から評価実験を行っている。〈西浦・朽津〉

5. その他

- (1) 顔料の分析

調査研究

島根県穴神1号横穴墓に使用されている顔料の分析を行い、「ベンガラ」と「赤色粘土」との2つの異なる赤色顔料を同時に用いている、珍しい装飾古墳であることを明らかにした。〈朽津〉

(2) 東アジア古代建築意匠とその源流について

東アジア古代建築意匠とその源流についての研究を行っている。法隆寺建築の雲形斗拱に代表される装飾的建築細部の意匠的特質を考察し、これらの類例と考えられるもののうち、特に漢代石闕の斗拱表現と、高句麗壁画古墳に見られる雲文表現とに注目し、比較検討を行っている。今後、対象とすべき資料を地域的に拡大し、広くその系譜を解明していく予定である。この他にいわゆる「チャイティア窓」と呼ばれるような、アジアに広く普遍性を持った意匠の源流と伝播の可能性について検討している。〈松本〉

(3) 遺跡建造物の復原のあり方についての調査

文化財の保存と活用における復原の問題はオーセンティシティに関わる重要な問題である。文化のバックグラウンドの異なる国々との国際協力を行うについては、十分な調査と理解が必要であり、実際の事例資料を収集している。〈松本〉

7. 国際調査研究

(1) 敦煌文化財保存修復に関する調査研究

1. 中国における研究

- (1) 平成6年8月16日～28(24)日に下記の訪中団が敦煌およびその周辺地域を訪れ、日中共同で下記の調査、研究、協議を行った。

諸橋 輝雄 (文化庁文化財保護部伝統文化課普及助成室長)
西浦 忠輝 (国際文化財保存修復協力室長)
増田 勝彦 (修復技術部第二修復技術研究室長)
松本 修自 (国際文化財保存修復協力室主任研究官)
岡田 健 (美術部主任研究官)

- 1) 展示研究センター内、中日共同研究室への引っ越し、特に環境計測無線通信システムの移動と調整。
 - 2) 展示研究センター開所式への出席、及び開所式にあわせた、日中共同研究の成果のパネル展示と資料配布。
 - 3) 第194、53窟に設置した、環境計測機器からのデータの読みだしと初期解析、電池の交換。
 - 4) 新規実験窟(第258窟)への温・湿度計測システムの設置。
 - 5) 第194、53窟他からの顔料サンプルの分析結果についての協議、及び分析調査の進め方とサンプルの採取についての協議。水サンプルの採取。
 - 6) 第53窟の壁画劣化形態調査および写真撮影。
 - 7) 平成7年度に日本で開催予定の国際シンポジウムについての協議。
 - 8) 西安の歴史博物館を中心とした墳墓壁画の保存修復に関わる調査。
- (2) 平成7年3月9日～19日に下記の訪中団が敦煌を訪れ、日中共同で下記の調査、協議を行った。

西川杏太郎 (所長)
河野 愛 (文化庁文化財保護部伝統文化課長)

調査研究

三浦 定俊（保存科学部長）
西浦 忠輝（国際文化財保存修復協力室長）
佐野 千絵（保存科学部主任研究官）
篠原 一夫（庶務課課長補佐）
勝木言一郎（情報資料部文献資料研究室研究員）
朽津 信明（国際文化財保存修復協力室研究員）
本村 俊孝（文化庁長官官房総務課総務係長）

- 1) 第194, 53, 258窟に設置した環境計測機器からのデータの読出しと初期解析。
- 2) 第194, 53窟他からの顔料サンプルの分析結果についての協議。
- 3) 分析調査の進め方と、サンプルの採取についての協議。サンプルの採取。
- 4) 第194, 53, 258窟の壁画劣化形態調査および写真撮影と図化。
- 5) 莫高窟壁画修復箇所についての材料・技法調査。
- 6) 修復用合成樹脂についての試験方法（実験室、現場）に関する協議。
- 7) 平成7年度国際シンポジウムについての協議。
- 8) 第2次5カ年計画合意書の交換方法についての協議（国家文物局）。

2. 日本における研究協議または研修

平成6年11月1日～平成7年3月20日

段 修 業（敦煌研究院保護研究所助理研究員）

目的：壁画の修復材料、技術に関する研修。

3. 第10回敦煌莫高窟壁画保存修復協力会議

平成7年3月24日に、協力会議委員、文化庁関係者、東文研関係者が出席して東文研において開催し、下記の議題について討議した。

- 1) 第9回敦煌莫高窟壁画保存修復協力会議議事録（案）について。
- 2) 平成6年度研究結果について。
- 3) 平成7年度研究計画（案）について。
- 4) 国際シンポジウムの平成7年度日本開催について

(2) スミソニアン研究機構との国際研究交流

科学研究費で「科学技術を利用した文化財研究法の開発」というテーマのもとで、青銅器・陶磁器・遺跡調査法開発の3つの研究課題の下に共同研究を進めている。6年度は日本側から、沢田正昭(奈良国立文化財研究所)、村上隆(奈良国立文化財研究所)が訪米し、青銅器についての共同研究をアメリカ側研究者と行い、陶磁器班は青柳洋治(上智大学)が渡米して調査を行い、遺跡調査法開発班では西村康(奈良国立文化財研究所)、ティーン・グッドマン(マイアミ大学中島分室)が渡米し研究成果の交流をおこなった。三浦定俊(東京国立文化財研究所)、馬淵久夫(作陽短期大学)が渡米して、まとめについて打合せを行った。アメリカ側からは、自然史博物館のグニエル・ロジャース氏が来日した。また、昨年引き続き、中国社会科学院世界宗教研究所の金正耀氏がスミソニアンと東京国立文化財研究所で、中国青銅器の化学組成の測定をICP法で行った。

(3) 海外所在日本美術品調査

当研究所では、昭和63年以来、欧米所在の明治時代以前の日本美術作品に関する基礎データの収集に努めてきた。平成2年度より、古文化財科学研究会が日本芸術文化振興会から助成金を得て「海外所在の日本文化財を対象とする調査研究」を行うことになり、当研究所がその委嘱を受けて調査研究を担当した。平成2年度のメトロポリタン美術館、3年度のバーク・コレクション、バーク・ファウンデーション、4年度のフィラデルフィア美術館、5年度のプライス・コレクションの調査に引き続き、6年度はサンフランシスコ・アジア美術館の絵画・彫刻作品の調査を行い、その成果として「海外所在日本美術品調査報告5 サンフランシスコ・アジア美術館 絵画・彫刻」を刊行した。

(4) タイ国石造遺跡の劣化現象と保存処置に関する調査研究

科学研究費国際学術研究海外学術調査により、平成4年度から3ヶ年計画で調査研究を行った。本年度は、12月に西浦忠輝、三浦定俊、松本修自、朽津信明の4人がタイ国を訪れ、東北部のクメール石造遺跡を中心に調査を行い、代表的な遺跡であるパノム・ルンおよびムアン・タムに設置した環境計測システムからのデータの読み出しと解析を行った。2月にタイ側研究者2名を招へいし、調査研究成果のまとめについての協議を行った。

(5) 文化財保護に関する日独学術交流

平成5年度から文部省科学研究費を受けて、「漆・ニスなど伝統的天然樹脂塗膜の劣化と保存に関する研究」が開始された。建造物に関して、10月に宮本長二郎、松本修自（東京国立文化財研究所）が、考古遺物に関して10月に村上隆、肥塚隆保（奈良国立文化財研究所）が訪独して、調査と研究協議を行った。また、10月にドイツ国内の関連施設の調査のため、川野邊渉（東京国立文化財研究所）が訪独した。明けて2月に、中里寿克、尾立和則（東京国立文化財研究所）が、漆工芸品の保存に関しての協議のため、訪独した。11月にドイツ側研究者、フローリアン・バイエラー、ウルスラ・パウマー、クリスチャン・ゼゲバードの3氏が訪日し、文化財保存における分光学的手法の応用に関する国際シンポジウムで研究発表を行い、共同研究の進展に関する協議を行った。

(6) シリア、アインダーラ神殿遺跡石彫レリーの保存修復

アインダーラ寺院遺跡はBC10世紀に遡る古代オリエントの重要な遺跡で、1956年と1976年に発掘が行われた。この遺跡を特徴づけるのは玄武岩に彫られたスフィンクス及びライオン像のレリーフである。これらは発掘直後から損傷が著しく、早急な保存、修復処置が必要とされていた。そこで本年度より5年計画で、住友財団の助成を受け、シリア政府考古総局との共同で、

保存修復事業を開始した。本年度は、6～8月の3カ月間シリアから研修生を招へいし、保存修復の基本技術を習得させた。日本側研究者及び技術者が9月末より2週間現地を訪れ、具体的な保存修復計画を作成した後、実験施工を行った。

8. 主要研究業績

- ①：著書・編書 ②：論文 ③：解説 ④：研究発表
⑤：講演・放送 ⑥：その他 平成6.4～7.3

所 長

西川杏太郎

- ② 東大寺南大門金剛力士像の修理に因んで一主に作者の問題について—
「歴史と地理」466 6. 6
- ⑤ 法隆寺の仏像と昭和資財帳（特別展記念講演）東京国立博物館 6. 5.21
- ⑤ 学芸員のための美術史研究（博物館職員講習）
国立教育会館社会教育研修所 6. 6.22
- ⑤ 文化財保護—伝統文化とわがまちの文化財（社会教育主事研修）
国立教育会館社会教育研修所 6. 5.12, 6. 9
- ⑤ 文化財保存と国際交流（文化財行政基礎講座）文化庁 6.10.12
- ⑤ 仏像制作の技法と作風（特別講演会）飯田市美術博物館 6.10.23
- ⑤ 日本美術史（在外公館赴任予定者研修会）外務省研修所 6.11.15

美 術 部

鶴田 武良（美術部長）

- ③ 沈銓筆一路榮華図 「国華」1182 6. 5
- ③ 『中国年鑑1994年版』文化・美術の項 中国研究所 6. 6
- ③ 中国美術館めぐり1・故宫博物院 「季刊水墨画」69 6. 7
- ③ 中国美術館めぐり2・中国美術館，炎黄美術館 「季刊水墨画」70 6.10
- ③ 中国美術館めぐり3・香港芸術館，香港中文大学文物館
「季刊水墨画」71 7. 1
- ④ The Nude Painting in Modern Asia University of East Anglia 6. 9

島尾 新 (主任研究官)

- ① 能阿弥から狩野派へ 「日本の美術」 338 至文堂 6. 7
- ② なぜ雪舟か？—雪舟研究の面白さ—
「雪舟」展カタログ 大和文華館 6.10
- ② 室町水墨画と「禅」
『アメリカが愛した日本』サンフランシスコ・アジア美術館所蔵ブランデー
ジ・コレクション日本絵画名品展カタログ 日本経済新聞社 7. 3
- ③ 明兆筆「達磨図」等解説 『世界の中の日本美術』美術年鑑社 6. 5
- ⑤ なぜ雪舟か—雪舟研究の面白さ— 大和文華館 6.10
- ⑥ 「和」「漢」の世界と唐物趣味 「なごみ」 6.10

山梨絵美子 (主任研究官)

- ② 明治大正の洋画における海の幸・山の幸主題の変遷 「国華」 1187 6.10
- ③ 高橋由一—見直される画家像へ 「美術手帖」 698 6.12
- ③ 作家解説 (小杉未醒, 山本鼎, 倉田白羊, 他)
『日本美術院百年史』第4巻 6. 5
- ⑥ 徳川家達の川村清雄宛書簡英文和訳, 他
『川村清雄研究』中央公論美術出版 6.12
- ⑥ 書評大原まゆみ著「ハプスブルグの君主像」
「週刊ポスト」12月2日号 6.12

岡田 健 (主任研究官)

- ② 鞆石窟と初唐様式 「美術研究」 360 6.10

田中 淳 (主任研究官)

- ③ 「絵画」の成熟ということ——一九三〇年代の日本画と洋画の側面
京都国立近代美術館ニュース「視る」 330 6.12

中野 照男 (第一研究室長)

- ② 克孜尔石窟故事画の形式及年代 (劉 永增 訳)

調査研究

- 「美術研究」75 人民美術出版社（北京） 6. 8
- ② 欧米の東洋学10 ル・コック 「月刊しにか」59 7. 2
- ④ キジル石窟の年代観 所内総合研究会 6. 4.12
- ⑤ シルクロードの美術 四街道県庁会講話 6. 5.28
- ⑤ シルクロードの仏教美術 千葉市民文化大学講座 6. 7. 8, 7.15
- ⑤ いま博物館が面白い 四街道中央公民館講座 6.11.18

三輪 英夫（第二研究室長）

- ② 再興日本美術院の洋画部・彫刻部 『日本美術院百年史』第4巻 6. 5
- ③ 日本近代洋画の巨匠—和田英作
「アサヒグラフ別冊 美術特集日本編」81 6.11
- ③ 明治が生んだ洋画家—田中寅三
「田中寅三展」カタログ 松戸市教育委員会 7. 2
- ④ 黒田清輝「舞妓」をめぐる 美術部・情報資料部公開学術講座 6.11.11
- ⑤ 黒田清輝と日本近代洋画 石橋美術館美術講座 6. 5.21
- ⑤ 黒田清輝一人と作品 飯田市美術博物館 6.10.30

芸 能 部

蒲生 郷昭（芸能部長）

- ① 邦楽曲名事典（平野健次，上参郷祐康と共同監修） 平凡社 6. 6
- ① 雅楽古楽器の総合的調査研究
科学研究費報告書（研究分担者との共著） 7. 3
- ② 地歌が摂取した能詞章 「芸能の科学」23 7. 3
- ② 長唄正本研究140～151（共同研究）「邦楽と舞踊」526～537 6. 4～7. 3
- ⑥ 「教訓抄」語彙索引—人名編—（東京芸大院生15名と共同作成）
「雅楽界」60 6. 5

鎌倉 恵子（演劇研究室長）

- ① 歌舞伎評判記集成第二期（翻刻 共同）別巻 岩波書店 7. 3
- ② 元禄歌舞伎と能—初代市川团十郎の場合— 「芸能の科学」23 7. 3

- ④ 初代市川團十郎の作劇法—能との関連に注目して—
東京国立文化財研究所総合研究会 6. 6

- ⑥ 歴史人物事典（担当項目執筆） 朝日新聞社 6.10

細井 尚子（演劇研究室）

- ② 経済と文芸の接点—「第五回中国泉州国際南音大会唱」—
「演劇学」36 7. 3

- ② 中国「戯曲」における位相差—「活捉」（「活捉三郎」）を例に—
「芸能の科学」23 7. 3

- ③ 舞台の上の英雄像 「月刊しにか」49 6. 4

- ⑥ 川劇にみる化粧(6)(7)（翻訳／原文 張中学）
「化粧文化」30, 31 6. 5, 11

- ⑥ 天橋芸人の世界（脚本翻訳・字幕） 日本放送協会 6.12

- ⑥ 東アジアにおける民俗と芸能国際シンポジウム（資料集翻訳）
同実行委員会 6.11

- ⑥ 東アジアにおける民俗と芸能国際シンポジウム（論文集翻訳）
同論文集実行委員会 7. 3

羽田 昶（音楽舞踊研究室長）

- ② 夢幻能と現在能 「解釈と鑑賞」59-11 6.11

- ② 〔楽〕〔神楽〕〔羯鼓〕のある狂言 「芸能の科学」23 7. 3

- ② 能の曾我物概観 「年刊 藝能」1 7. 3

- ③ 世阿弥名句抄1～12 「機械技術」42-4～43-3 6. 4～7. 3

- ⑤ 中世社会と狂言 名古屋能楽友の会特別例会 7. 2. 6

- ⑥ 復曲能「櫛天狗」の台本校訂 能劇の座第5回公演 6. 7

高桑いづみ（音楽舞踊研究室）

- ① 日本の音の文化（共著） 6. 6

- ① 雅楽古楽器の総合的調査研究 科学研究費報告書（共著） 7. 3

- ② 能以前の鼓胴 「鉄仙」423 6. 5

調査研究

- ② 扇拍子覚書 「芸能の科学」 23 7. 3
④ 雅楽鼓の調査・中間報告 東洋音楽学会第45回大会 6.10.30
④ 能の囃子—その技法と歴史— 芸能部夏期学術講座 5. 7.11~14
⑤ 能楽鑑賞講座 国立能楽堂公開講座 7. 1~3

石井 倫子 (音楽舞踊研究室)

- ② 番外曲〈泣不動〉覚書 「鍔仙」 428 6.10
② 〈黒川〉の周辺—斬り組ミ靈験能の視点から— 「中世文学」 39 6.11
② クロスオーバーする芸能の姿 「橘香」 6.11
② 能における宗教的素材受容の一考察—番外曲〈家持〉〈泣不動〉を中心に—
「芸能の科学」 23 7. 3
⑥ 歴史人物事典 (担当項目執筆) 朝日新聞社 6.10

中村 茂子 (民俗芸能研究室長)

- ② 武器と芸能〈その2〉—流鏑馬を中心に— 「芸能の科学」 23 7. 3
④ 番楽の民俗的背景 芸能部公開学術講座 6.12. 9
⑤ 私と神楽 第267回東京都民俗芸能大会 東京芸術劇場 7. 2.26
⑥ 千葉県の民俗芸能緊急調査報告書 (共同監修) 千葉県立房総のむら 7. 3

山本 宏子 (民俗芸能研究室)

- ② 民俗芸能の経済学に向けて—門付け型芸能とその経費
「民俗芸能」 19 6. 5
② 「河童」の民俗芸能 「芸能の科学」 23 7. 3
④ 獅子舞と太鼓 芸能部公開学術講座 6.12. 9
⑤ バリ芸能の経済学—「楽園」の下部構造 APEX 6. 5.14
⑤ 沖繩の太鼓 朝日カルチャーセンター 6. 6.26
⑤ バリの子供に関する歌 朝日カルチャーセンター 6. 8. 6
⑤ 秋田の番楽 朝日カルチャーセンター 6.12.10
⑥ 伝統に生きる 「人と芸能」 6.12
⑥ バリ島のわらべうたを追いかけて 8・9

保存科学部

三浦 定俊 (保存科学部長)

- ② Scanning a silver sword (S. Miura, C. Sano, C. Tanaka)
"Museum International", 183, pp.13-15 (1994) 6. 3
- ② Control of climate for rock-cliff sculptures against frost shattering, mold growth and salt efflorescence,
"Preventive Conservation-Practice, Theory and Research", Preprints for IIC Ottawa Congress, pp.73-75 6. 9.12~16
- ② 法隆寺「焼損金堂・壁画」特別公開における保存対策 (三浦, 佐野, 坂本稔, 木川, 神庭信幸) 「保存科学」34, pp.22-36 7. 3
- ② 博物館・美術館等における燻蒸の実施状況とその問題点 (木川, 佐野, 門倉, 三浦) 「保存科学」34, pp.37-44 7. 3
- ③ 芸術・文化の謎を解明する放射線検査
「グラフ四季」No.37, pp.14-15 6. 4
- ③ 国宝をエックス線で覗く
「エネルギーレビュー」14巻7号, pp22-25 6. 7
- ③ 名画の下の「隠し絵」をみる
「Isotope News」No. 484, pp.14-15 6.10
- ③ 保存環境の考え方 (三浦, 佐野)
「設備と管理」29巻2号, pp.35-39 7. 2
- ③ 保存担当学芸員研修の11年 (三浦, 佐野)
「保存科学」34, pp.45-53 7. 3
- ④ 隠された肖像の画像分析 (三浦, 花泉弘, 渡辺朗, 田中千秋)
第16回古文化財科学研究会大会 6. 6. 4~5
- ④ 敦煌莫高窟の気象—敦煌地域の降水特性, 特に莫高窟の保存に関わる大雨について (藤田創造, 高橋英紀, 三浦)
第16回古文化財科学研究会大会 6. 6. 4~5
- ④ 博物館・美術館等における燻蒸の実施状況とその問題点 (木川, 門倉, 佐野,

調査研究

- 三浦) 第16回古文化財科学研究会大会 6. 6. 4~5
- ④ 東京国立文化財研究所による文化財収蔵展示施設館内環境調査の実施状況
(I) (佐野, 三浦) 第16回古文化財科学研究会大会 6. 6. 4~5
- ④ 赤外線画像処理による変色した絵画の調査—寿桂尼肖像について—(西子雅
美, 大橋義春, 井上啓輔, 杉山久志, 神庭信幸, 三浦)
第16回古文化財科学研究会大会 6. 6. 4~5
- ④ 航空機からの画像を用いた遺跡探査 (花泉, 三浦)
日本文化財科学会第11回大会 6. 6.11~12
- ④ Application of chemiluminescence counting for detecting deterioration of
organic cultural property (C. Sano, W. Kawanobe, S. Miura, H. Mabuchi)
第18回国際研究集会 Preprints, pp.133-142 6.10.31~11. 2
- ④ A spectral method for dampness measurement of an open-air object (H.
Hanaizumi, T. Tsunashima, S. Fujimura, S. Miura)
第18回国際研究集会 Preprints, pp.87-93 6.10.31~11. 2
- ⑤ 梱包の科学
指定文化財 (美術工芸品) 展示取り扱い講習会 (東京) 6. 7.21
- ⑤ 同上 (京都) 6.12. 3
- ⑤ 保存科学概論 歴史民俗資料館等専門職員研修会 6.11.30

佐野 千絵 (主任研究官)

- ② Scanning a silver sword (S. Miura, C. Sano, C. Tanaka)
Museum International, 183, pp.13-15 (1994) 6. 3
- ② 法隆寺「焼損金堂・壁画」特別公開における保存対策 (三浦, 佐野, 坂本稔,
木川, 神庭信幸) 「保存科学」34, pp.22-36 7. 3
- ② 博物館・美術館等における燻蒸の実施状況とその問題点 (木川, 佐野, 門倉,
三浦) 「保存科学」34, pp.37-44 7. 3
- ③ 保存環境の考え方 (三浦, 佐野)
「設備と管理」29巻2号, pp.35-39 7. 2
- ③ 保存担当学芸員研修の11年 (三浦, 佐野)
「保存科学」34, pp.45-53 7. 3

- ④ 博物館・美術館等における燻蒸の実施状況とその問題点 (木川, 門倉, 佐野, 三浦) 第16回古文化財科学研究会大会 6. 6. 4~5
- ④ 東京国立文化財研究所による文化財収蔵展示施設館内環境調査の実施状況 (I) (佐野, 三浦) 第16回古文化財科学研究会大会 6. 6. 4~5
- ④ Application of chemiluminescence counting for detecting deterioration of organic cultural property (C. Sano, W. Kawanobe, S. Miura, H. Mabuchi) 第18回国際研究集会 Preprints, pp.133-142 6.10.31~11. 2

平尾 良光 (化学研究室長)

- ② 出土鉄器の鉛同位体比法による原料産地の推定
科学硏究費・一般硏究 B 成果報告書 pp76 (1994)
- ② Lead behavior in abalone shell (Y. Hirao, A. Matsumoto, H. Yamakawa, M. Maeda, K. Kimura)
"Geochimica et Cosmochimica Acta" 58, pp.3183-3189 (1994)
- ② 江西新干大洋洲商墓青銅器的鉛同位素比值硏究 (金正耀, W. T. Chase, 平尾, 膨活凡, 馬淵久夫, 三輪嘉六, 譚開遜)
「考古」323, pp.744-747 (1994)
- ② 山梨県東山北遺跡から出土した銅製品の自然科学的調査 (平尾, 榎本淳子, 瀬川富美子)
甲斐風土記の丘・曾根丘陵公園東山北遺跡—第1次~第3次調査—/山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第79集 pp.143-148 (1993)
- ② カマン・カレホユックから出土した炭化物の炭素14法による年代測定
『アナトリア考古学硏究』/中近東文化センター編IV, pp.113-118 (1995)
- ② 廣漢三星堆遺物坑青銅器的鉛同位素比值硏究 (金正耀, 馬淵久夫, W.T. Chase, 三輪嘉六, 平尾, 陳徳安, 趙殿増)
「文物」No.465, pp.80-85 (1995)
- ② 岡山県久夜町中原25号墳から出土した耳輪の自然科学的硏究 (平尾, 瀬川富美子)
『中国横断自動車道建設に伴う発掘調査2』/岡山県埋蔵文化財発掘調査報告93, 日本道路公団広島建設局津山工事事務所・岡山県教育委員会編

調査研究

- pp.477-485 (1995)
- ② 百間川原尾島遺跡から出土した鉄剣形銅剣についての自然科学的研究(平尾, 鈴木浩子, 榎本淳子)
『百間川原尾島遺跡4』/岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97, 岡山県教育委員会 pp.302-306 (1995)
- ② 足守川遺跡群出土青銅器の鉛同位体比について(馬淵久夫, 平尾, 榎本淳子)
『足守川加茂 A 遺跡・足守川加茂 B 遺跡・足守川矢部南向遺跡』/岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94, 岡山県教育委員会 pp.1126-1134 (1995)
- ④ 表面電離型質量分析計による鉄器の鉛同位体比測定
第11回日本文化財科学会要旨集, pp45 6. 6.12
- ④ トルコ共和国カマン・カレホユック遺跡出土銅製品の鉛同位体比(平尾, 榎本淳子)
第11回日本文化財科学会要旨集, pp119 6. 6.12
- ④ 荒神谷出土青銅製品の自然科学的研究 島根県教育委員会 6. 7.12
- ④ 自然科学から見た文化財 東京女子美術大学講演会 6.11.15
- ④ 分析化学と文化財 神奈川県工業試験所フォーラム講演会要旨集 7. 3.15

石川 陸郎 (物理研究室)

- ① 保存科学から見た美術館施設の設計と管理
『芸術経営学講座 美術編』, 土屋良雄編, 東海大学出版会 6. 9
- ② 雅楽古楽器の X 線透視写真撮影資料
科学研究費成果報告書『雅楽古楽器の総合的調査研究』 7. 3
- ② 木漆工 X 線透視写真撮影資料
『木漆工1』/法隆寺献納宝物特別調査概報 XV 東京国立博物館 7. 3
- ② Environment Control of Newly-built Museums, R. ISHIKAWA
“The 14th International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property: Cultural Property and Its Environment” pp.179-192
7. 3
- ⑤ 展示と照明—博物館の理想的環境—, 東京国立博物館 月例講演会 7. 1

門倉 武夫 (生物研究室長)

- ② 文化財と環境問題 「産業と環境誌」, vol.23, No.10, pp.56-61 6.10
- ② 東アジア地域を対象とした酸性大気汚染物質の文化財および材料への国際共同影響調査 (辻野らと共著) 「全国公害研究誌」 vol.20, No.1 7.1
- ② Acidic Gas and Mist in Environments Surrounding Cultural Property and Their Effects on Metals,
 “The 14th International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property : Cultural Property and Its Environment” pp.53-66
 7.3
- ④ 文化財の保存と活用 ”PASSION”, No.15, K. K.金剛, pp.17-19 6.11
- ④ 文化財の保存科学
 腐食防食技術講演会 日本防錆技術協会資料 P23~35 6.5
- ④ 文化財におよぼす酸性雨の影響評価法について〔III〕(羽山, 二宮と共同)
 第16回古文化財科学研究会大会講演要旨集 6.6
- ④ 文化財に及ぼす環境因子の影響 (二宮, 羽山と共同)
 日本文化財科学会11回大会講演要旨集 pp.37-38 6.12
- ④ 文化財の保存と環境
 第17回鉄構塗装技術討論会 日本鋼構造協会 日本化学会 7.3
- ⑤ 酸性雨が文化財に及ぼす影響
 パブリックアートメンテナンスセミナー 彫刻の森美術館・環境芸術総合研究所 6.8
- ⑤ 文化財に及ぼす環境汚染の影響 工学院大学公開講座 6.11.18
- ⑤ 文化財保護と大気汚染, その影響と対策
 パブリックアートコンサベーションセミナー (静岡県衛生環境センタープロジェクト) 6.11.22
- ⑤ 文化財保存科学 明治大学特別講座 6.12.2
- ⑥ 汚れた空気も校倉よせつけず 朝日新聞 (大阪版) 6.7.6
- ⑥ 像たちの沈黙「酸性雨になく文化財」 月刊 Earthian, pp.27-29 6.10
- ⑥ 鎌倉の大仏さまも酸性雨でお悩み? pp.80-81 月刊テラ 6.10
- ⑥ 大気汚染から守れ—文化財が泣いている—東大寺, 興福寺, 鎌倉大仏

- ⑥ 文化財 表ではみられない—大気汚染や酸性雨, 劣化深刻全国調査へ—

木川 りか (生物研究室)

- ② 各種文化財等の糸状菌同定報告 (木川, 新井英夫)
「保存科学」34, pp.8-12 7. 3
- ② 法隆寺「焼損金堂・壁画」特別公開における保存対策 (三浦, 佐野, 坂本稔,
木川, 神庭信幸) 「保存科学」34, pp.22-36 7. 3
- ② 博物館・美術館等における燻蒸の実施状況とその問題点—保存担当学芸員研
修におけるアンケートから—(木川, 佐野, 門倉, 三浦)
「保存科学」34, pp.37-44 7. 3
- ④ 博物館美術館等における燻蒸の実施状況とその問題点(中間報告) (木川, 門
倉, 佐野, 三浦) 第16回古文化財科学研究会大会 6. 6
- ⑥ 無公害な文化財虫害防除法に関する基礎研究—低酸素濃度殺虫法の日本伝統
文化財への適用 平成6年度笹川科学研究助成報告書 7. 3

山野 勝次 (生物研究室)

- ② イエシロアリの分布について 「文化財の虫菌害」27, pp.3-7 6. 6
- ② 認定薬剤“キシラモン-TR”と“キシラモン-EX”の防蟻効力試験
「文化財の虫菌害」28, pp.25-37 6.12
- ③ 文化財の害虫とその防除(1) 「しろあり」96, pp.24-32 6. 4
- ③ 広がるイエシロアリの分布 「ピリックジャーナル」4(1), p.1 6. 4
- ③ 文化財の害虫とその防除(2) 「しろあり」97, pp.19-39 6. 7
- ③ 文化財の害虫とその防除(3) 「しろあり」98, pp.17-30 6.10
- ③ 「第14回文化財虫菌害燻蒸処理実務講習会」報告
「文化財の虫菌害」28, pp.52-54 6.12
- ③ 文化財の害虫とその防除(4) 「しろあり」99, pp.13-34 7. 1
- ⑤ 紙質資料の虫害と防除対策 (社)日本図書館協会 6.12. 5
- ⑤ 文化財の害虫と防除対策「第16回文化財の虫菌害保存対策研修会」

主要研究業績

- (財)文化財虫害研究所 6. 6.20
- ⑤ シロアリに関する実務的知識「平成6年度しろあり防除施工士資格第2次指定講習会」 (社)日本シロアリ対策協会 6. 9. 9
- ⑤ 文化財虫菌害燻蒸処理仕様書ならびに危害防止措置規定について「第14回文化財虫菌害燻蒸処理実務講習会」 (財)文化財虫害研究所 6.10.25
- ⑤ 庭付き1軒建て(共同構成) テレビ朝日 6.12.11
- ⑤ 昆虫学の基礎知識・昆虫による文化財の被害と防除・文化財の殺虫燻蒸「第16回文化財虫菌害防除作業主任者の能力認定試験とその講習会」 (財)文化財虫害研究所 7. 1.23
- ⑤ シロアリの生態と被害「平成7年度しろあり防除施工士資格第1次指定講習会」 (社)日本シロアリ対策協会 7. 1.24
- ⑤ アメリカカンザイシロアリと野外薬剤効力試験
TJK 技術交流会講演会 7. 3. 4
- ⑥ 通勤電車風景いろいろ 「文化財の虫菌害」28, pp.57-59 6.12

修復技術部

宮本長二郎(修復技術部長)

- ② 日本古代住居建築の研究 横浜国立大学博士論文 6.12
- ⑤ 豪族居館の建築様式と機能 奈良県香芝市二上山博物館講演会 6. 5
- ⑤ 但馬国分寺の復原 兵庫県日高町但馬国分寺展講演 6. 9
- ⑤ 三内丸山遺跡の集落と建築構造 青森市シンポジウム講演 6. 9

川野邊 渉(主任研究官)

- ② A study of false glaze by using of synthetic resins
大英博物館保存修復部レポート1993 6. 6
- ④ 核磁気共鳴法の保存科学における応用
第18回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会 6.11
- ⑤ 文化財における銅屋根の酸性雨による影響 銅センター講演会 7. 3

調査研究

中里 寿克（第一修復技術研究室長）

- ② 密陀絵の研究 I 「保存科学」 34 7. 3.31
- ⑤ 資料の修理 I 歴史民俗資料館等専門職員研究会 6.12. 2
- ⑤ 建築装飾と漆 日本建築セミナー 6.12. 7
- ⑤ 木造文化財と漆工芸の修復について 東京学芸大学学術講演会 7. 1.27
- ⑤ ポルトガルにおける漆芸研修の成果について
文化財保存修復研究協議会 7. 1.17
- ⑤ 漆工芸品にみる螺鈿文様について 会津若松技術支援センター 7. 3.17
- ⑤ 「劣化と保存」各論—漆—
博物館・美術館等の保存担当学芸員研修 6. 7.26

増田 勝彦（第二修復技術研究室長）

- ① 装潢の技術，修復記録『在外日本美術の修復』（共） 7. 3
- ③ パークス・コレクションとその時代—海を渡った江戸の和紙—
パークス・コレクション展カタログ 6. 4
- ③ ペーパーサイエンス，科学が明かす和紙のすばらしさ
淡交別冊第11号 和紙—紙が語る日本の暮らし— 6. 8
- ④ 「海外の日本美術コレクションの保存問題—絵画と表装の問題について—」
第13回国際シンポジウム，東洋美術史研究上の諸問題，国際交流美術史研究会
6. 7
- ⑤ 「絵画保存と和紙—日本と西欧の文化の中で—」
第4回和紙セミナー 主催季刊和紙編集部後援全国手すき和紙連合会／毎日
新聞社 6.10
- ⑤ 「日本における襖・壁張り付けなどの障屏画装丁法の伝統と修復」
「技術・文化・交流」パリ国際シンポジウム 7. 3
- ⑤ 「劣化と保存」各論—紙—，「修復材料—伝統材料—」
博物館・美術館等の保存担当学芸員研修 6. 7.21
- ⑥ 「保存科学」 史料管理学研修 6. 9.18～19
- ⑥ 「紙の保存修復」国際研修 6.11.24～12.14
- ⑥ ビデオパッケージ”Japanese Paper Conservation”の製作 6.11

尾立 和則 (第二修復技術研究室)

- ① 装潢の技術, 修復記録『在外日本美術の修復』(共) 7. 3
- ⑤ 「劣化と保存」各論—絵画の彩色層—
博物館・美術館等の保存担当学芸員研修 6. 7.26
- ⑤ 現地修復家との共同作業 (ポーランド・クラコフ国立博物館の場合)
文化財保存修復研究協議会 6. 1.17
- ⑥ 「紙の保存修復」国際研修 6.11.23~6.12.16
- ⑥ ビデオパッケージ” Japanese Paper Conservation” の製作 6.11

青木 繁夫 (第三修復技術研究室長)

- ② 象眼された遺物のプラズマによる保存処理について
「保存科学」34 7. 3.31
- ⑤ 考古試料保存概論 埼玉県埋蔵文化財センター研修 6. 6.15
- ⑤ 「劣化と保存」各論—考古遺物—
博物館・美術館等の保存担当学芸員研修 6. 7.25
- ⑤ 金属文化財の保存 修理技術者講習会 文化庁文化財保護部 6.11.12
- ⑤ 文化財保存と環境汚染 社団法人日本銅センター 6.11.25
- ⑤ 資料の修理
歴史民俗資料館等専門職員研修会 文化庁文化財保護部 6.12. 2
- ⑤ 考古資料の保存 群馬県立歴史博物館研修 7. 3.16

情報資料部

廣井 雄一 (情報資料部長)

- ② 兵庫鎖・長覆輪太刀の制作年代について—巖島神社の太刀を中心に—
「美術研究」361 7. 3
- ③ 作品解説「薙刀—備前国長船長光」他
「名刀展—佐藤寒山先生十七回忌追悼—」図録 致道博物館 6. 4
- ⑥ 一文化財集中地区特別総合調査報告書—「愛知県の文化財」工芸の項
文化庁・愛知県教育委員会 7. 3

調査研究

井手誠之輔（主任研究官）

- ② 高麗の阿弥陀画像と普賢行願品 「美術研究」362 7. 3
- ② 高麗仏画にみえる卍字と千幅輪文
平成5・6年度科学研究費一般研究(A)「東アジア美術における人のかたち」
報告書 7. 3
- ③ 図版解説, 宗峰妙超像 『世界の中の日本絵画』美術年鑑社 6. 5
- ④ 高麗の阿弥陀画像と普賢行願品 美術部・情報資料部研究会 6. 6.22
- ④ 日本銀行所蔵至元23年銘阿弥陀如来図をめぐる
特別研究「中国仏教美術基準作品調査研究」に関する研究会 7. 3. 8

長岡 龍作（主任研究官）

- ② 1993年の歴史学界, 回顧と展望（日本・古代・美術史）
「史学雑誌」103-5 6. 5
- ② 平安初期彫像の基礎的問題—彫像の「場」をめぐる
科学研究費一般研究(A)「東アジア美術における人のかたち」報告書
7. 3
- ④ 神護寺薬師如来像の再検討 美術部・情報資料部研究会 6. 5.25

米倉 迪夫（文献資料研究室長）

- ① 『源頼朝像—沈黙の肖像画』（絵は語る 第4巻） 平凡社 7. 3
- ② 日本中世肖像画覚書—「源頼朝像」をめぐる断章—
平成5・6年度科学研究費一般研究(A)「東アジア美術における人のかたち」
報告書 7. 3
- ③ 源頼朝像・平重盛像・明恵像・隨身庭騎絵・花園法皇像（解説）
『世界の中の日本絵画』美術年鑑社 6. 5
- ④ 中世肖像画異聞
第28回東京国立文化財研究所美術部・情報資料部公開学術講座 6.11
- ④ 肖像画の名づけをめぐるいくつかの問題（「肖像画の諸問題」）
美術史学会東支部大会 6.11
- ④ 日本の肖像画 浦和市社会生活大学 6.12

- ④ 足利直義像拾遺 美術部・情報資料部研究会 7. 1

勝木言一郎（文献資料研究室）

- ② 中国中原地方およびその周辺地域における阿弥陀仏龕の研究
「鹿島美術研究」（年報第11号別冊） 6.11
- ② 敦煌壁画の観経変日想観図にみる山水表現とその意味について
「藝叢」11号 7. 3
- ② 敦煌壁画の観経变相十六観図にみる人物表現について
平成5・6年度科学研究費一般研究(A)「東アジア美術における人のかたち」
報告書 7. 3
- ④ 敦煌莫高窟〈阿彌陀三尊五十菩薩圖〉的圖像
敦煌国際学術研究討論会 6. 8
- ④ 小南海石窟中窟における九品往生図浮き彫りにについて
敦煌国際学術研究討論会 6. 8
- ④ 敦煌壁画の観経変日想観図にみる山水表現とその意味について
筑波大学芸術学美術史学会例会 6.11.19
- ⑤ 中国美術入門・敦煌の世界 敦煌壁画にみる仏教説話図について
田無市市民講座 7. 2. 5

鈴木 廣之（写真資料研究室長）

- ② 往還する絵画——五世紀漢字文化圏のなかの「唐絵」の意義—
「美術研究」361 7. 3
- ② 美術という身体
平成5・6年度科学研究費一般研究(A)「東アジア美術における人のかたち」
報告書 7. 3
- ② 研究発表2：浮世絵の誕生と古典の継承
「鹿島美術財団第18回美術講演会講演録」鹿島出版会 7. 3
- ③ 狩野永徳 「朝日歴史人物事典」朝日新聞社 6.11
- ③ 画像を読む 「情報知識学会ニューズレター」30 5. 2
- ⑤ 浮世絵の誕生と古典の継承

調査研究

- 鹿島美術財団美術講演会「美術への眼差し—日本と西洋」 6. 5.21
- ⑤ 江戸の文化メディア
神奈川県立近代美術館主催「第14回県民アカデミア美術講座・都市と人間—新しい芸術と生活への提言—」 6.11. 6
- ⑥ 日仏会館主催「連続シンポジウム『美術』その近代と現代をめぐる10の争点」
パネラー 6. 9.24

国際文化財保存修復協力室

西浦 忠輝 (国際文化財保存修復協力室長)

- ① 『敦煌文化財の保存修復に関する調査研究 論文集 (II)』
東京国立文化財研究所 7. 3
- ② Assessment by Radioactive Labelling of the Efficiency of Conservation Treatment Applied to Volcanic Tuffs (Sramek と共著)
" Lavas and Volcanic Tuffs " (ICCRUM) 6.12
- ② Hydrophobization Treatment : Preliminary Tests in the Easter Island Tuff (De Witte らと共著)
" Lavas and Volcanic Tuffs " (ICCRUM) 6.12
- ③ シリア, アイン・ダーラ神殿遺跡石彫レリーフの保存修復協力事業
「文化庁月報」No.312 6. 9
- ③ Brief Report on the Restoration Project for the Stone Reliefs of Ain Dara Temple
シリア考古総局へ提出 6.11
- ③ 人類の至宝を後世に—文化財保護のための国際協力—
「フォト」11.1 6.11
- ④ 石材保存用樹脂の評価試験 (III) —強化用樹脂の凝集力付与効果— (大石らと共同)
第16回古文化財科学研究会大会 6. 6
- ④ シベリア・シシュキノ岸壁画の劣化状況と保存対策について
第16回古文化財科学研究会大会 6. 6
- ④ Site Management in Nara (浅川と共同)
International Conference on Restoration of the Architectural Heritage of Asia 7. 1

- ⑤ 敦煌莫高窟の保存—日中共同研究のあゆみと成果—(ポスター)
 敦煌研究院展示研究センター開所記念展示 6. 6
- ⑤ 文化財の科学的保存修復技術について
 神戸芸術工科大学集中講義 (文化財保存デザイン論) 6. 6
- ⑤ 石製文化財の保存処理の諸問題
 京都造形芸術大学集中講義 (保存学実習II) 6. 6
- ⑤ 劣化と保存各論—木— 博物館・美術館等保存担当学芸員研修 6. 7
- ⑤ 劣化と保存各論—石— 博物館・美術館等保存担当学芸員研修 6. 7
- ⑤ 石造文化財の保存と修復 大分県石造文化財基礎調査委員会 6. 7
- ⑥ 文化財の保存と科学技術 「マテリアルライフ」Vol.6 No.2 6. 4

松本 修自 (主任研究官)

- ① 『和歌山県の近世社寺建築』(共著) 和歌山県教育委員会 6.10
- ① 『滋賀県の近代和風建築』(共著) 滋賀県教育委員会 7. 3
- ② 和歌山県の近世社寺建築における細部意匠 和歌山県教育委員会 6.10
- ② 石名田木舟遺跡出土の瓦塔について 福岡町教育委員会 7. 3
- ④ 久米官衙遺跡群の建物構造について 松山市教育委員会 6.10.23

朽津 信明 (国際文化財保存修復協力室)

- ② ブルージュ救世主大聖堂における煉瓦の劣化とその保存対策
 「古文化財の科学」39 6.12
- ② 吉佐山根1号墳及び穴神1号横穴墓における赤色顔料
 「一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財調査報告書」10 7. 3
- ④ 環境汚染と岩石の風化—ヨーロッパにおける石造文化財の劣化から—
 日本地質学会第101年年会 6. 9
- ⑤ Conservation of mural paintings in China.
 ベルギー王立文化財研究所セミナー 6. 6

IV. 事 業

1. 出 版

(1) 美術研究

平成6年度は第360号から第362号が下記の内容で刊行された。

美術研究 第360号 (平成6年10月)

鞆石窟と初唐造像 岡田 健

家業としての絵画制作

—信実とその後継者の描いた肖像画— マリベス・グレーヒル

池田 忍訳

全国売立目録所在一覧

〈東京国立文化財研究所・東京国立博物館・東京芸術大学所蔵目録編 (一)〉

(研究資料)

都守 淳夫

中村 節子

美術研究 第361号 (平成7年3月)

往還する絵画

—五世紀漢字文化圏のなかの「唐絵」の意義— 鈴木 廣之

兵庫鎖・長覆輪太刀の制作年代について

—巖島神社伝来の太刀を中心に— 廣井 雄一

全国売立目録所在一覧

〈京国立文化財研究所・東京国立博物館・東京芸術大学所蔵目録編二〉

(研究資料)

都守 淳夫

中村 節子

美術研究 第362号 (平成7年3月)

高麗の阿弥陀画像と普賢行願品 井手誠之輔

茶会記に現れた絵画 (研究資料)

(2) 日本美術年鑑

平成6年版 (平成7年3月)

平成5年の内容をもつ。B5版339頁。

平成5年の美術界年史

美術展覧会 (現代美術・西洋美術)

美術展覧会 (東洋古美術)

美術文献目録 (定期刊行物所載) (現代美術・西洋美術)

美術文献目録 (定期刊行物所載) (東洋古美術)

物故者

(3) 芸能の科学

古典芸能についての研究論文, 調査報告, 資料翻刻等を掲載している。平成6年度は下記の論考集を刊行した。

芸能の科学23 (平成7年3月発行)

能における宗教的素材受容の一考察

一番外曲〈家持〉〈泣不動〉を中心に—

石井 倫子

扇拍子覚え書

高桑いづみ

〔楽〕〔神楽〕〔羯鼓〕のある狂言—狂言の囃子事その二—

羽田 昶

元禄歌舞伎と能—初代市川団十郎の場合—

鎌倉 恵子

地歌が摂取した能詞章

蒲生 郷昭

武器と芸能〈その二〉—流鏑馬を中心に—

中村 茂子

「河童」の民俗芸能

山本 宏子

中国「戯曲」における位相差—「活捉」(「活捉三郎」)を例に—

細井 尚子

(4) 保存科学

所属研究員による文化財の保存と修復に関する科学的調査, 受託研究報告等の論文報告及び修復処置概報等を掲載している。平成6年度は第34号を発行した。掲載論文は下記の通りである。

事 業

保存科学 第34号

象嵌された遺物のプラズマによる保存処理について

青木 繁夫・犬竹 和

各種文化財等の糸状菌同定報告

木川 りか・新井 英夫

密陀絵の研究 (I)

中里 寿克・竹永 幸代

法隆寺「焼損金堂・壁画」特別公開における保存対策

三浦 定俊・佐野 千絵・坂本 稔・木川 りか・神庭 信幸

博物館美術館等における燻蒸の実施状況とその問題点

—保存担当学芸員研修におけるアンケートから—

木川 りか・佐野 千絵・門倉 武夫・三浦 定俊

保存担当学芸員研修の11年

三浦 定俊・佐野 千絵

(5) 国際研究集会プロシーディングス

平成2年度

The 14th International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property : Cultural Property and Its Environment

「文化財と環境」を主題とした保存科学部担当の国際研究集会(2.10.11~10.13)のプロシーディングス(英文)を6年度に刊行した。今回は、外的要因に影響されやすく脆弱な文化財を取り巻くさまざまな環境の整備について、多くの問題点を追求した。本プロシーディングスには、発表論文、討論などが含まれる。主な内容は下記のとおりである。

【Session I】

1. Various Environmental Problems Concerning the Preservation of Cultural Property K. TOISHI

【Session II】

2. Surveys for Indoor Air Pollution into Historic Buildings : the Italian Experience M. MARABELLI
3. Preservation of Outdoor Sculptures S. ICHIKAWA
4. Cleaning the Air : The Role of Environmental Chemistry in the Decay of Cultural Objects S. SHERWOOD

5. Acidic Gas and Mist in Environment Surrounding Cultural Property and Their Effects on Metals T. KADOKURA

【Session III】

6. Effect of Indoor Contaminants on Cultural Properties and Countermeasure T. KENJO
7. Some Practical Considerations and Solutions for Preservation in the Museum Environment T. WEISSER
8. Conservation Facilities and Environment of the National Museum of Contemporary Art, Korea J. KANG

【Session IV】

9. Change of Temperature and Humidity of Art during Air Transportation S. HASEGAWA
10. RH and Temperature Variations in a Transit Package N. KAMBA
11. Showcase of Cultural Property for the Exhibition S. HANZAWA
12. Preventive Conservation in National Trust Houses S. STANIFORTH

【Session V】

13. Protection Works of Art from the Damaging Effects of Light D. SAUNDERS
14. Environment Control of Newly-built Museums R. ISHIKAWA
15. Indoor Exhibition Climate and Conservation Measures H. KUJIRAI

2. 黒田清輝巡回展

黒田清輝の遺作を多く所蔵している当研究所は、黒田清輝の功績を記念し、併せて地方文化の振興に資するために、昭和52年度からの事業として黒田清輝巡回展を年1回地方において開催してきた。平成6年度は次の会場において開催された。

事 業

会 場 飯田市美術博物館
会 期 平成6年10月8日(土)～11月6日(日)
主 催 東京国立文化財研究所・飯田市美術博物館・信濃毎日新聞社
開催日数 25日間
入場者数 8,234人
陳列点数 油彩・パステル61点, 木炭デッサン50点, 写生帖17冊, 書簡3
点, 日記5冊, 参考資料若干
図 録 A4版変型, 128頁, 原色図版24頁, 単色図版73頁

3. 公開学術講座

美術部・情報資料部(第28回)

日 時 平成6年11月11日(金) 18:00～20:30
会 場 国立教育会館大会議室
講 演 (1) 中世肖像画異聞 米倉 迪夫
(2) 黒田清輝筆「舞妓」をめぐって 三輪 英夫

芸能部(第25回)

日 時 平成6年12月9日(月) 18:00～20:30
会 場 江戸東京博物館ホール
テ ー マ 番楽の技法と伝承
講 演 (1) 番楽の民俗的背景 中村 茂子
講 演 (2) 獅子舞と太鼓 山本 宏子
実 演 神舞 舞い手 佐藤一太郎
信夫 舞い手 佐藤 正男
その他 下百宅番楽講中 佐藤 善雄

4. 夏期学術講座

芸能部（第19回）

芸能部では、芸能の多角的かつ総合的な研究に資することを目的として、例年夏期4日間にわたる学術講座を、首都圏各大学の大学院生を対象に実施している。会場を東京国立文化財研究所会議室とし、芸能部員がそれぞれの専門分野における研究成果を体系的に論ずる。

平成6年度は「能の囃子—その技法と歴史—」というテーマを設けて高桑いづみが担当し、7月11日から14日までの4日間にわたり実施した。受講者は慶応義塾大学、実践女子大学、お茶の水女子大学、早稲田大学、共立女子大学、法政大学、東京芸術大学、東京大学、明治大学の各大学院生で、受講者数は22名。日程及びテーマ細目は下記の通りである。

7月11日（月）

序論—囃子の構成・流儀—
 中世芸能から能の囃子へ—鼓の変遷—
 鼓からとらえた能の「間」

7月12日（火）

大鼓と小鼓の折りあい(1)
 大鼓と小鼓の折りあい(2)
 能管での囃子

7月13日（水）

能管の流儀差
 能管と一節切の楽曲交流(1)—音取—
 時の調子論—四穴の享受—

7月14日（木）

能管と一節切の楽曲交流(2)—祭礼囃子—
 能管と一節切の楽曲交流(3)—海道下り—
 質疑

5. 博物館・美術館等保存担当学芸員研修

近年博物館・美術館の数が増加すると共にその施設が近代化し、燻蒸室、保存・修理などの保存に関する施設設備が整備されて保存部門を担当する職員が配置されつつある。しかし、これらの職員が保存科学の知識や技術を修得しようとしても適当な学習の場や教材がないのが現状である。そのため博物館、美術館などの学芸員の保存担当者を対象に、文化財の科学的保存に関する基本的な知識および技術について研修を行い、その資質の向上をもって文化財の保護に資する事を目的とし、研修会を開催した。受講者数は22名。日程および講師は下記の通りであった。

7月18日（月）

開講式・オリエンテーション

保存環境総論—文化財の保存と環境— 保存科学部長 三浦 定俊

保存環境実習—温湿度測定機器の取扱い— 三浦 定俊

7月19日（火）

保存環境各論—温湿度— 三浦 定俊

保存環境各論—展示梱包ケースの温室調節—

国立歴史民俗博物館 神庭 信幸

保存環境実習—湿度の制御法— 三浦 定俊

7月20日（水）

保存環境各論—大気汚染とその影響— 生物研究室長 門倉 武夫

保存環境各論—室内汚染— 保存科学部主任研究官 佐野 千絵

保存環境実習—室内汚染の調査法— 佐野 千絵

7月21日（木）

保存環境各論—光と劣化— 佐野 千絵

保存環境各論—照度基準— 神庭 信幸

保存環境実習—照度の測定と調節— 佐野 千絵

7月22日（金）

事 業

生物被害／虫—害虫の生態と被害—	保存科学部調査員	山野 勝次
生物被害／要因とメカニズム—		門倉 武夫
劣化と保存各論—紙—	第二修復技術研究室長	増田 勝彦
劣化と保存各論—絵画の彩色層—	第二修復技術研究室研究員	尾立 和則
保存環境実習—環境調査 1—		佐野 千絵
7月25日（月）		
劣化と保存各論—木—	国際文化財保存修復協力室長	西浦 忠輝
劣化と保存各論—石—		西浦 忠輝
劣化と保存各論—ガラス—		三浦 定俊
劣化と保存各論—考古遺物—	第三修復技術研究室長	青木 繁夫
保存環境実習—環境調査 2—		佐野 千絵
7月26日（火）		
劣化と保存各論—油彩画—	国立西洋美術館	河口 公夫
劣化と保存各論—漆—	第一修復技術研究室長	中里 寿克
劣化と保存各論—金属 1—		青木 繁夫
劣化と保存各論—金属 2—		青木 繁夫
保存環境実習—環境調査 3—		佐野 千絵
7月27日（水）		
調査手法各論—化学分析—	化学研究室長	平尾 良光
調査手法各論—画像計測—	修復技術部主任研究官	川野邊 渉
修復材料各論—伝統材料—		増田 勝彦
修復材料各論—合成樹脂—		川野邊 渉
保存環境実習—環境調査 4—		佐野 千絵
7月28日（木）		
ケーススタディ		
—博物館における収蔵・展示の問題とその対策—		佐野 千絵
—美術館における収蔵・展示の問題とその対策—		三浦 定俊
7月29日（金）		
文化財科学の動向—現状と歴史—		三浦 定俊
閉講式		

6. 国際研究集会

昭和52年から毎年行われている「文化財の保存に関する国際研究集会」は18回を数え、今年度は保存科学部が担当した。「文化財保存における分光学的方法」をテーマに10月31日から11月2日まで3日間行われた。材質分析のためにスペクトルを利用する方法は古くから文化財の研究に用いられてきたが、近年、文化財の研究にますます積極的に利用されつつある。本研究集会は、分光学的方法が保存修復の分野でいかなる成果をあげているか検討することを目的とした。

発表者は国外9名、国内8名、その他ポスターによる発表者を加え、120名を越す参加者によって活発な討議が行われた。

名 称：The 18th International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property : Spectrometric Examination in Conservation (文化財保存における分光学的手法)

日 時：平成6年10月31日～11月2日

会 場：国立教育会館社会教育研修所（東京都台東区上野公園内）

題名および発表者

10月31日（月）

【基調講演】

1. 非破壊ガンマ線分光学による古人骨の年代測定

フランス：国立科学研究センター

横山 祐之

【セッション I】

1. カナダにおける文化財保存への微小部 X 線回折法と赤外分光分析法の応用

カナダ：国立保存研究所

イアン・ウェインライト

2. 陶磁器の胎土および釉薬の分析化学的研究

国立歴史民俗博物館

斎藤 努

3. 文化財保存における赤外分光分析

インド：国立文化財研究所

B. V. カルバード

4. 劣化した古代タイ漆の TGA—FTIR 法による研究

タイ：国立博物館

シリチャイ・ワンチャレオントラクル

11月1日（火）

【セッションII】

5. ヨーロッパ中世の武具の調査—剣と兜

ドイツ：連邦材料試験研究所

クリスチャン・ゼゲバード

6. オージェ電子分光分析による金属考古資料の表面キャラクタリゼーション

奈良国立文化財研究所

村上 隆

【セッションIII】

7. 素描・絵画の非破壊画像分光分析

ドイツ：デルナー研究所

フロリアン・バイエラー

8. 屋外にある文化財の濡れの分光測定

法政大学

花泉 弘

9. 保存のための光ファイバー反射分光測定と分光画像

イタリア：国立電磁波研究所

マウロ・バッシ

11月2日（水）

【セッションIV】

10. 博物館保存における材料科学—先史古代技術の解明

フランス：博物館群研究所

ミシェル・ムニユ

11. 文化財への放射光 X 線分析の応用

東京理科大学

中井 泉

【セッションV】

12. 博物館資料の保存研究への安定同位体質量分析法の応用

アメリカ：スミソニアン研究機構

ノリーン・チュロス

13. 核磁気共鳴法（NMR）の保存科学における応用

東京国立文化財研究所

川野邊 渉

事業

14. 有機質文化財の劣化の研究への化学発光計測の応用

東京国立文化財研究所

佐野 千絵

【ポスターセッション】

X線分析による正倉院宝物に用いられた無機顔料の調査

正倉院事務所

成瀬 正和

7. 第3回「紙の保存修復」の国際研修

世界の紙の修復専門家12名（12カ国）を集め、文化庁および国際文化財保存研究センター（ICROM）と共同開催で「紙の保存修復」国際研修を行った。脆弱な古文書や版画など、紙を素材とした文化財の修理では、世界の文化財に日本の表具技術が役に立つ事が知られるようになっている。この研修では、この日本の表具技術を伝えることを目的とした。

3週間の研修は表具の基本的な技術を参加者が経験できるような内容の実践研修を中心としたが、日本の文化史・文化財保護法の沿革・文化財に使われている伝統的な素材・和紙と洋紙の特性等についての講義を行うとともに、研修旅行では和紙の紙漉場で修復材料である和紙をより深く理解するようつとめた。

海外から、より正確な技術を求める声が増える中、今回のような日本の専門家の直接の指導のもとで行われる研修会の意義は深いと確信している。

〈主催〉

東京国立文化財研究所

文化庁

イクロム（ICROM）

INTERNATIONAL CENTRE FOR THE STUDY OF THE PRES-
ERVATION AND THE RESTORATION OF CULTURAL PROP-
ERTY

〈協力〉 京都国立博物館

〈期間〉 平成6年11月24日～12月14日（21日間）

〈場所〉 11月24日～11月25日 東京国立文化財研究所
11月26日～12月14日 京都国立博物館
スタディーツアー 奈良市・奈良県宇陀郡吉野町

〈参加者〉

MEDEN Susana

メデン・スサーナ

アルゼンチン 書籍修復センター

GAVIOLA Patricia Cecilia

ガヴィオラ・パトリシア・セシリア

オーストラリアニューサウスウェールズ州立図書館

KINDL Silvia

キンドゥル・シルヴィア

カナダ文明博物館

HEJTMANKOVA Marie

ヘイトマンコーバ・マリー

チェコ国立美術館

NIELSEN Ingelise

ニールセン・インゲリーゼ

デンマーク国立修復学校

TIIDUS Marge

ティードス・マルゲ

エストニア国立図書館

ALEXIOU Maria

アレクシユー・マリア

ギリシャ国立銀行文化財団

FITZGERALD Julie Anne

フィッツジェラルド・ジュリー・アン

ニュージーランド博物館

MAGGEN Michael

マゲン・マイケル

事 業

イスラエル博物館

ONESTI Anna

オネスティ・アンナ

イタリア国立グラフィック研究所

RANJITKAR Kedar

ランジットカール・ケダル

ネパール文化財修復研究センター

DOWNEY Anne

ダウニー・アン

アメリカ文化財・美術品修復センター

8. 会 議

(1) 文化財保存修復研究協議会

主 題 海外所在の日本美術修復の技術的諸問題

日 時 平成7年1月17日(火)

場 所 東京国立文化財研究所 別館会議室

主 旨 近年の海外における日本美術品の保存修復活動はめざましいものがあり、又それに連動して海外からの要請による研修・調査事業も以前にも増して活発に行われている。この現状をとらえ、種々の技術的な問題点を検討する。

講 演

海外所在日本絵画を日本で修復することの問題点

文化庁美術工芸課 宮島 新一

イタリア・ガルド美術館における漆工品修復例報告

輪島漆芸美術館 島口 慶一

海外における漆工品保存と修復の現状について

目白漆芸研究所 室瀬 和美

ポルトガルにおける漆芸研修の成果について

東京国立文化財研究所修復技術部 中里 壽克

現地修復家との共同作業（ポーランド・クラコフ国立博物館の場合）

東京国立文化財研究所修復技術部 尾立 和則

海外における日本美術修復の問題点

東京国立文化財研究所修復技術部 増田 勝彦

9. 国際・国内交流

(1) 平成6年度職員の海外渡航

氏名	渡航先	目的	期間	旅費の出所等
浦生 郷昭	オーストラリア	オーストラリアにおける日本音楽研究の現状調査	自平成6年4月8日 至平成6年4月15日	私費
鈴木 廣之	米国	16世紀障屏画の調査研究	自平成6年4月19日 至平成6年4月23日	私費
鶴田 武良	中国、香港	現代中国画動向の調査	自平成6年4月26日 至平成6年5月6日	私費
三浦 定俊	イタリア、フランス	ICCROM 財政事業委員会出席他	自平成6年5月15日 至平成6年5月22日	ICCROM 私費
岡田 健	中国	仏教美術遺跡の調査	自平成6年6月27日 至平成6年7月9日	私費
貴志 辰夫	米国	在米日本美術品保存修復協力をに係る協議	自平成6年7月7日 至平成6年5月6日	国際交流基金
増田 勝彦	米国	在米日本美術品調査	自平成6年7月10日 至平成6年7月17日	国際交流基金
宮本長二郎	中国	大明宮含元殿日中共同保存事業協力委員会出席及び現地調査	自平成6年7月18日 至平成6年7月22日	ユネスコ信託基金
米倉 迪夫	イギリス	大英博物館所蔵日本中世絵画作品調査	自平成6年8月4日 至平成6年8月11日	私費
長岡 龍作	シンガポール、スリランカ、インド	法隆寺献納宝物と正倉院宝物の源流に関する調査研究	自平成6年8月24日 至平成6年9月10日	科学研究費
西浦 忠輝	中国	敦煌文化財の保存修復に関する調査共同研究	自平成6年8月16日 至平成6年8月28日	科学研究費
増田 勝彦	中国	敦煌文化財の保存修復に関する調査共同研究	自平成6年8月16日 至平成6年8月28日	科学研究費
松本 修自	中国	敦煌文化財の保存修復に関する調査共同研究	自平成6年8月16日 至平成6年8月28日	外国旅費
岡田 健	中国	敦煌文化財の保存修復に関する調査共同研究	自平成6年8月16日 至平成6年8月28日	科学研究費

事 業

氏名	渡航先	目的	期間	旅費の出所等
鶴田武良	イギリス	中国絵画シンポジウム出席並びに中国絵画調査	自平成6年9月9日 至平成6年9月30日	先方負担 一部私費
三浦定俊	米国, カナダ	研究成果協議とまとめに関する打合せ	自平成6年9月8日 至平成6年9月18日	科学研究費
尾立和則	ポーランド	在外日本美術品(浮世絵版画)の取扱い指導及びブックマッピング指導	自平成6年9月17日 至平成6年9月24日	文化財保護振興財団
西浦忠輝	シリア, トルコ	シリア, アイン・ダーラ神殿遺跡石彫レリーフの保存修復に関する調査, 研究, 指導及びトルコ国内石造文化財保存調査	自平成6年9月27日 至平成6年10月18日	住友財団
西川杏太郎	米国	在米日本美術品の調査及び米国関係者との協議	自平成6年10月2日 至平成6年10月7日	古文化財科学研究会
中野照男	米国	在米日本美術品の調査	自平成6年9月21日 至平成6年10月7日	古文化財科学研究会
島尾新	米国	在米日本美術品の調査	自平成6年9月21日 至平成6年10月7日	古文化財科学研究会
野久保昌良	米国	在米日本美術品の調査	自平成6年9月21日 至平成6年10月7日	古文化財科学研究会
岡田健	米国	在米日本美術品の調査	自平成6年9月21日 至平成6年10月7日	古文化財科学研究会
鈴木廣之	米国	在米日本美術品の調査	自平成6年9月26日 至平成6年10月7日	古文化財科学研究会
大堀岳満	米国	米国関係者との協議	自平成6年9月26日 至平成6年10月5日	古文化財科学研究会
西浦忠輝	カナダ	文化財保存の国際的研究動向に関する調査	自平成6年9月10日 至平成6年9月19日	外国旅費
三浦定俊	米国, カナダ	研究成果協議とまとめに関する打合せ	自平成6年9月8日 至平成6年9月18日	科学研究費
三浦定俊	中国	石窟文化財保存研究研修講師及び国家文物局との打合せ	自平成6年9月29日 至平成6年10月6日	科学研究費 先方負担
宮本長二郎	ドイツ	ドイツ建造物・町並み保存のための調査	自平成6年10月9日 至平成6年10月17日	科学研究費
松本修自	ドイツ	ドイツ建造物・町並み保存のための調査	自平成6年10月7日 至平成6年10月17日	科学研究費

事 業

氏名	渡航先	目的	期間	旅費の出所等
川野邊 渉	ドイツ	ドイツにおける漆芸品の調査	自平成6年10月9日 至平成6年10月24日	科学研究費
三浦定俊	イタリア	イクロム理事会、財政事業委員会、 AAB、FPC 合同委員会出席	自平成6年10月16日 至平成6年10月23日	文部省 イクロム
鶴田武良	中国	中国第8回全国美術展の調査並び に近代美術資料の収集	自平成6年12月21日 至平成7年1月1日	日中友好会館 一部私費
西浦忠輝	タイ	タイ国石造遺跡の劣化現象と保存 処置に関する調査	自平成6年12月4日 至平成6年12月17日	科学研究費
三浦定俊	タイ	タイ国石造遺跡の劣化現象と保存 処置に関する調査	自平成6年12月4日 至平成6年12月9日	科学研究費
松本修自	タイ	タイ国石造遺跡の劣化現象と保存 処置に関する調査	自平成6年12月4日 至平成6年12月17日	科学研究費
朽津信明	タイ	タイ国石造遺跡の劣化現象と保存 処置に関する調査	自平成6年12月4日 至平成6年12月17日	外国旅費
日高信二	タイ	タイ国関係機関との協議	自平成6年12月4日 至平成6年12月13日	外国旅費
西浦忠輝	タイ	国際会議における講演及び討議	自平成7年1月10日 至平成7年1月17日	アジアソサイア ティー
勝木言一郎	中国	中国中原地区における石窟寺院の 調査研究	自平成6年11月28日 至平成6年12月16日	私費
宮本長二郎	パキスタン	モヘンジョダロ、ラホール、タキ シラ及びベシェワールの城塞と仏 教遺跡の調査	自平成7年1月21日 至平成7年1月29日	私費
中里壽克	ドイツ	ドイツ国内のジャパニング様式の 調査	自平成7年2月3日 至平成7年2月12日	科学研究費
尾立和則	ドイツ	ドイツ国内のジャパニング様式の 調査	自平成7年2月3日 至平成7年2月12日	科学研究費
西川杏太郎	韓国	国際共同研究「文化財における環 境汚染の影響と修復技術の開発研 究」を実施するための協議	自平成7年2月20日 至平成7年2月26日	外国旅費
青木繁夫	韓国	国際共同研究「文化財における環 境汚染の影響と修復技術の開発研 究」を実施するための協議	自平成7年2月20日 至平成7年2月26日	外国旅費
西川杏太郎	中国	日中共同研究計画の推進に関する 中国関係者との協議等	自平成7年3月9日 至平成7年3月19日	外国旅費

事 業

氏名	渡航先	目的	期間	旅費の出所等
篠原一夫	中国	日中共同研究計画の推進に関する中国関係者との協議等	自平成7年3月9日 至平成7年3月19日	外国旅費
三浦定俊	中国	敦煌文化財の保存修復に関する調査研究	自平成7年3月9日 至平成7年3月19日	外国旅費
西浦忠輝	中国	敦煌文化財の保存修復に関する調査研究	自平成7年3月9日 至平成7年3月19日	外国旅費
佐野千絵	中国	敦煌文化財の保存修復に関する調査研究	自平成7年3月9日 至平成7年3月19日	外国旅費
朽津信明	中国	敦煌文化財の保存修復に関する調査研究	自平成7年3月9日 至平成7年3月19日	科学研究費
勝木言一郎	中国	敦煌文化財の保存修復に関する調査研究	自平成7年3月9日 至平成7年3月19日	外国旅費
貴志辰夫	米国	在米日本美術品保存修復協力をに係る協議	自平成7年2月20日 至平成7年3月2日	国際交流基金
増田勝彦	米国	在米日本美術品保存修復協力をに係る調査	自平成7年2月20日 至平成7年3月1日	国際交流基金
山代文雄	米国	在米日本美術品保存修復協力をに係る協議	自平成7年2月28日 至平成7年3月8日	外国旅費
中野照男	米国	海外所在日本文化財調査のため	自平成7年2月28日 至平成7年3月8日	古文化財科学研究会
岡田 健	中国, フランス, イタリア, ギリシャ, スイス, ドイツ, イギリス, 米国	中国仏教美術の調査・研究等	自平成7年3月1日 至平成7年12月31日	在外研究員費
鎌倉恵子	中国	中国文化財の保存に関する調査研究	自平成7年2月10日 至平成7年2月17日	外国旅費
勝木言一郎	台湾	台湾における仏教美術の調査研究	自平成7年2月20日 至平成7年2月24日	私費
増田勝彦	フランス	「技術・文化・交流」パリ国際シンポジウムでの講演	自平成7年3月18日 至平成7年3月26日	名古屋市

事 業

(2) 招へい研究員等

国外招へい研究員

氏 名	国 籍	役 職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
EDET, Abu Solomon エデットアブソロモン	ナイジェリア	国立博物館保存科学部長	6. 3. 1 ～6. 8. 31	民具及び青銅遺物の保存修復研究	修復技術部 青木繁夫
李 瓏姫 リ ランヒ	韓 国	漆芸品修復家	6. 6. 17 ～7. 6. 16	漆芸品の伝統的技法の調査と新技術の開発	修復技術部 中里壽克
金 奎虎 キム キュホ	韓 国	湖巖美術館保存科学室・研究員	6. 9. 1 ～7. 6. 30	金属文化財の保存科学的研究	保存科学部 平尾良光
張 慶浩 チャン キョンホ	韓 国	文化財研究所長	6. 9. 1 ～6. 9. 7	文化財における環境汚染の影響と修復技術の開発研究の打合せ	修復技術部 宮本長二郎
段 修業* トゥアン シウイェ	中 国	敦煌研究院	6. 11. 1 ～7. 3. 9	敦煌莫高窟壁画の修復材料に関する共同研究	修復技術部 増田勝彦
GERSTLE, Andrew* ガーストル アンドルー	オーストラリア	ロンドン大学東洋アフリカ研究学院教授	6. 11. 5 ～6. 11. 12	浄瑠璃及び歌舞伎の共同研究	芸能部 鎌倉恵子
SUMANOV, Lazar* スマノフ ラザール	マケドニア	マケドニア国立記念物保存研究所副所長	6. 11. 9 ～6. 11. 21	木造建築の保存修復手法の研究, 特に耐震対策についての日本と東欧の比較研究	国際文化財保存修復協力室 松本修自
FORTIN, Lyette* フォルタン ライアト	カナダ	遺産保存計画建築修復監督官	6. 11. 9 ～6. 11. 21	建築の修復整備技法の国際的比較研究	国際文化財保存修復協力室 松本修自
TIIDUS, Marge ティードス マルゲ	エストニア	国立図書館保存部長	6. 11. 22 ～7. 1. 21	紙の保存と修復	修復技術部 増田勝彦
金 思恵* キム サドク	韓 国	文化財研究所保存科学部研究員	6. 11. 25 ～6. 12. 24	環境汚染による文化財の劣化	修復技術部 青木繁夫
NDORO, Webber ンドロ ウェバー	ジンバブエ	国立博物館記念物研究所調整官	6. 12. 1 ～7. 3. 3	考古遺跡の保存に関する基本的理念及び施工技術	修復技術部 青木繁夫

事 業

氏 名	国 籍	役 職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
王 濶* ワン ロン	中 国	中央美術学院教授	6.12. 8 ～6.12.23	8～9世紀における中国仏教美術の研究	美術部 岡田 健
BRANDON, James R.* ブランドン ジェイムス	米 国	ハワイ大学教授	6.12.10 ～6.12.24	海外での歌舞伎研究の現状と研究上の国際交流について	芸能部 蒲生郷昭
高 美慶* カオ メイチン	香 港	中文大学芸術系教授	7. 1.25 ～7. 2. 4	民国期絵画と明治大正の日本画家の影響についての研究	美術部 鶴田武良
STEWART, John* ステュワート ジョン	カナダ	カナダ自然公園遺跡管理局保存部保存修復計画室長	7. 2. 2 ～7. 2.11	屋外石造遺跡の保存及び修復に関する研究協議等	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝
WEAVER, Martin* ウィーヴァー マーティン	カナダ	コロンビア大学保存研究所長	7. 2. 2 ～7. 2.11	文化財保存国際協力の為の技術的諸問題に関する協議等	国際文化財保存修復協力室 松本修自
金 英那 (KIM, Youn- gna, Ms.) キム ヨンナ	韓 国	徳成女子大学校教授	7. 2. 9 ～7. 2.18	19, 20世紀における日韓美術交流についての研究	美術部 山梨絵美子
ROGERS, Daniel ロジャース ダ ニエル	米 国	スミソニアン研究機構自然史博物館考古室長	7. 2.13 ～7. 2.24	科学技術を利用した文化財研究法の開発	保存科学部 三浦定俊
W H I T E, Julia, M.* ホワイト ジュ リア	米 国	デンバー美術館アジア部門準学芸員	7. 2.13 ～7. 3. 4	ニューメキシコにおける近現代中国絵画及び東洋・日本美術の研究状況	美術部 鶴田武良
YUPHO, Kit- cha ユフォ キチャ	タ イ	教育省芸術局考古部	7. 2.20 ～7. 2.28	建造物遺跡の保存修復に関する調査・研究	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝
PETCHMAR- K, Sermkit ベチュマルク セルムキット	タ イ	教育省芸術局博物館部	7. 2.20 ～7. 2.28	博物館資料の保存・修復に関する調査・研究	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝

事 業

氏 名	国 籍	役 職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
WICHIAN-SRI, Watcharawadee ワンチャンスリ ワチャラワデー	タ イ	教育省芸術局博物館部	7. 2.20 ～7. 2.28	博物館資料の保存・修復に関する調査・研究	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝
DHANA-KOSES, Ronarit ダナコセス ロ ナリト	タ イ	教育省芸術局考古部	7. 2.20 ～7. 2.28	建造物遺跡の保存修復に関する調査・研究	国際文化財保存修復協力室 西浦忠輝
WOUTERS, Helena* ワッターズ ヘレナ	ベルギー	ベルギー王立文化財研究所研究部研究員	7. 2.22 ～7. 3. 8	屋外無機材質文化財の劣化と保存に関する研究	国際文化財保存修復協力室 朽津信明
WEBB, Marianne* ウェップ マリ アン	カナダ	ロイヤルオンタリオ博物館工芸保存専門家	7. 2.26 ～7. 3.11	日本の漆芸品修復のための技術的調査	修復技術部 中里壽克
MEREDITH, Philip Ian メレディスフィ リップ イアン	オランダ	国立民族学博物館極東保存センター保存専門家	7. 2.26 ～7. 3.13	和紙の製作現場の視察と紙保存専門家との協議	修復技術部 尾立和則
PIETRZAK, Ewa ベトルザク エ ヴァ	ポーランド	クラクフ国立博物館保存専門家	7. 2.26 ～7. 3.27	クラクフ国立博物館所蔵浮世絵の保存修復技術の研修	修復技術部 尾立和則
KOESLING, Volker* ケースリング フォルカー	ドイツ	ベルリン交通技術博物館	7. 3. 2 ～7. 3.14	水浸木材の処理方法に関する研究	修復技術部 青木繁夫
前川 信* マエカワ シン	日 本	米国ゲティー保存研究所勤務	7. 3.12 ～7. 3.18	ゲティー保存研究所との共同研究に関する協議	保存科学部 三浦定俊
渡辺雅子* ワタナベ マサ コ	日 本	米国メトロポリタン美術館準学芸員	7. 3.12 ～7. 3.18	物語絵画に関する共同研究	美術部 島尾 新
姜 昌求 (KANG, Chang gu) カン チャング	韓 国	湖巖美術館保存科学研究室研究員	7. 3.13 ～7. 3.19	象嵌された遺物の技法調査と保存処理法研究	修復技術部 青木繁夫

氏 名	国 籍	役 職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
LUDWIG, Ken* ルードヴィッヒ ケン	米 国	米国地学研究所研 究員	7. 3.20 ～7. 3.29	青銅製品の産地推定の ための鉛同位体比測定	保存科学部 平尾良光
金 正耀* チン チャンヤ オ	中 国	中国社会科学院世 界宗教研究所副研 究員	7. 3.21 ～7. 3.29	殷周青銅器の化学組成 についての研究	保存科学部 平尾良光

注1) *は、研究所予算で招へいしたことを表す。*は、一部研究所予算で招へいしたことを表す。

注2) 国際研究集会(9名)、「紙の保存修復」国際研修(12名)の国外招へい研究員等については、各々の項に記載した。

国内招へい研究員

氏 名	現 職	招へい期間	共同研究課題	研究代表者
内田 哲夫	名古屋工業大学助教授	7.2.20～2.24, 2.27～3. 3	青銅遺物の化学組成の研究	化学研究室長 平尾良光

事 業

(3) 平成6年度海外研究者等の来訪

氏 名	国 籍	所 属 等
羅 華慶 (LUO, Hua-qing, Mr.) ルオ ファチン 外1名	中 国	敦煌研究院考古研究所研究員
KALINAYOVA, Jana, Dr. カリナヨーヴァ ヤナ	スロヴァキア共和国	国立博物館音楽博物館副館長
POPESCU, Atanasie, Mr. ポベチュ アタ ナシア	ルーマニア	ブカレスト建築研究所生物学的劣化研究部長
H A B I B , Malallah Ali Mr. ハビーブ マラ ラ アリ	オ マ ー ン	国家遺産文化省顧問
NOUTH, Narang, Mr. ノウト ナラン	カンボジア	文化芸術省長官
SHARIF, Muhammad シャリフ ムハン マド	バキスタン	ラホール北部考古局長
張 徳勤 (ZHANG, Deqin, Mr.) チャンドーチン 外9名	中 国	国家文物局長
SEIN, Myint, Mr. セイン ミント	ミャンマー	文化省新国立博物館内装顧問
SIEREK, Jaroslaw シエレク ヤロ スロウ	ポーランド	ワルシャワ国立博物館職員

V. 研究施設・設備

1. 蔵書

美術関係図書

日本・東洋古美術，日本近代・現代美術，西洋美術の全般にわたる研究所を中心に，関連図書，各種叢書，辞典類など漢書(42,245)，洋書(4,146)，計46,391冊のほか，各都道府県市町村教育委員会編集の文化財関係報告書，美術関係雑誌，紀要類，売立目録，展覧会目録などを所蔵し，所内及び所外の研究者の利用に供している。

芸能関係図書

雅楽・寺事・能・歌舞伎・文楽・邦楽・邦舞・民俗芸能・寄席芸，その他わが国の伝統芸能の研究に必要な図書10,262冊を所蔵する。演芸画報・歌舞伎新報・歌舞伎(第1次)・テアトロ(第1次)・新劇・上方・民俗芸術・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説などの雑誌，それに声明本・謡本・離子手付本・丸本などの台本・譜本も収集している。

保存科学・修復技術関係図書

伝統的生産及び工芸技術書，技術史またはそれらの科学的究明を試みたもの，修理工事報告書及び化学・物理学・生物学部門の保存科学の関連漢書，洋書，合わせて3,201冊を所蔵している。

本年度における収集数と総計は次表のとおりである。

区分	美術関係		芸能関係		保存科学・ 修復技術関係		計
	和漢書	洋書	和漢書	洋書	和漢書	洋書	
6年度	645冊	36冊	383冊	23冊	32冊	8冊	1,060冊
総数	42,600冊	4,110冊	10,100冊	162冊	2,129冊	1,072冊	60,173冊

2. 資 料

美術関係資料

実物よりの直接撮影を主にした写真資料の作成整理と、購入写真、複写写真による補足整備に加えて、印刷物中の図版をおさめるという方式で、当研究所設立当初より一貫して力を注いできた写真資料を有する。それらは日本東洋古美術、日本近代・現代美術、西洋美術の全域にわたり、それぞれ絵画、書籍、彫刻、工芸、建築等の諸部門に及ぶ。特別大型のものから小型のものまで総数凡そ26万点、原板保有量はほぼ3分の1にあたり、別にマイクロ・フィルム255巻がある。写真資料のほか、拓本、作家伝記資料、落款印章資料、近代・現代作家・団体・作品資料、資料スクラップ等と、図書カード、図版カード、各種索引類など多数。

芸能関係資料

レコード、録音テープ、シネフィルム、ビデオテープ、写真等による芸能資料を数多く備えている。レコードには、毎年各社から発売される伝統芸能関係レコードのほか、昭和35年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションレコード5,450枚が含まれている。安原コレクションは、明治・大正・昭和三代にわたって発売された各種邦楽レコードを網羅したもので、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。録音テープ、ビデオテープ、及び写真は、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・邦舞・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能を対象に記録してきたもので、演奏法の解析を中心とした写真、テープ、あるいは各種文書の記録写真等も含んでいる。資料別の所蔵数は、つぎのとおりである。

区 分	録 音 テ ー プ		シネフィルム		ビ デ オ テ ー プ	
	analog	digital	8mm	16mm	β, VHS方式	8mm
平成6年度	17本	0本	0本	0本	27本	20本
合 計	2,885本	336本	198本	4本	390本	87本

区 分	音 盤		
	SP・LP	CD	VHD・LD
平成6年度	0枚	94枚	0枚
合 計	7,118枚	156枚	16枚

3. 主要機器・設備

美術部・情報資料部		
名 称	使 用 目 的	備 考
X線透過撮影装置	軟X線照射による絵画・彫刻の顔料・構造等の非破壊分析。	
紫外線照射装置	紫外線照射による蛍光物質の分析。補絹・補彩領域の明別。	
顕微鏡装置	双眼実体顕微鏡による美術作品細部の非接触観察。	KARL ZEISS
赤外線テレビ	赤外線照射による墨線の抽出。下図・銘文等の解読。	浜松テレビ
ビデオイメージスコープ	内視鏡による彫刻作品等の内部観察。	オリンパス
ローカルエリアネットワーク	LANによる情報処理の円滑化。情報の統合・共有化。	NET ONE (アンガマンバス)
画像処理装置	デジタル画像処理技術による多角的画像分析。画像データベースの試作。	NEXUS6800シリーズ
光ディスクファイリングシステム	大量の調書・カード類の一括管理。簡易画像データベースの試作。	RIFILE

研究施設・設備

芸 能 部		
名 称	使 用 目 的	備 考
舞台（試聴室）	日本の古典芸能を実演するのに必要最小限の広さを持ち、実技者を招いて研究のための試演を行う。またその実演を舞台に続く調整室で撮影し録音する。	間口590cm 奥行き485cm 残響時間0.30/秒
録音室	実技者を招いて分析研究のための、良質な録音を行う。	間口421cm 奥行き670cm 残響時間0.15/秒アナログ・デジタルの録音可能。
メログラフ	音の高さと強さの細かい変化を正確に計り、分かりやすいグラフで記録して、音楽的分析を行う。	型名 B/T
レーザー・ターンテーブル	レーザー光でアナログ・レコードを非接触で再生する。貴重なレコードを半永久的に使用できる。	エルプ LT-IX

保存科学部

名 称	使 用 目 的	備 考
蛍光 X 線分析装置	金属、顔料、岩石、土器などの化学組成を非破壊的に測定する。理学電機製は可搬型である。	フィリップス PW1404LS, 理学電機 TBF01
原子吸光分析装置	岩石、土器、金属などに含まれる元素組成を測定する。	ジャーレルアッシュ AA8500
誘導結合プラズマ分析装置 (ICP)	岩石、土器、金属などに含まれる元素組成を測定する。	セイコー SPS1100
質量分析装置	鉛、ストロンチウム同位体比測定から、青銅、岩石などの原料産地を推定する。	VG-Sector-J
イオンクロマト分析装置	岩石、鏽中の陰イオン濃度や空気中の NO _x 、SO _x 濃度の測定から鏽の進行状況や、空気汚染の程度などを推定する。	横河電気 IC500P

名 称	使 用 目 的	備 考
電子スピン共鳴装置	遷移金属イオンや劣化に伴って生じるフリーラジカルの強度を測定し、劣化の進みかたや程度を推定する。	日本電子 JES-RE1X
化学発光計測装置	化学反応に伴って放出される微弱な光の強度を測定し、反応の進みかたや劣化の度合いを測定する。	東北電子 CL-100
走査型電子顕微鏡	高倍率で試料表面の状態を観察するとともに、構成元素の分布を調べ、構造・技法について情報を得る。	日本電子 JMS5100
低真空度走査型電子顕微鏡	高倍率で試料表面の状態を観察するとともに、構成元素の分布を調べ、構造・技法について情報を得る。	日本電子5800LV
工業用 X 線検査装置	透視撮影によって彫刻・工芸・考古遺物・などの構造や光電子撮影によって絵画の顔料を調べる。	フィリップス MG321他
減圧燻蒸装置	文化財加害生物を防除するための燻蒸法の研究・開発を行う。	SK2
微生物検体作成装置	微生物胞子の発芽に及ぼす風の影響を調べる。	小林精機 CP 型
ガスクロマトグラフ質量分析計	有機質文化財の構成物質および劣化の判定のためにガス状として有機物を分離し、有機分子の判定を行う。	ヒューレットパッカード HP5890, 日本電子 Automass
液体クロマトグラフ質量分析計	有機質文化財の構成物質および劣化の判定のために液体状態で有機物を分離し、有機分子の判定を行う。	ヒューレットパッカード HP, 日本電子 LX2000
DNA シーケンサ	文化財の劣化原因、生物等の遺伝子配列を調べ、種の判定を行う。	ファルマシアバイオテック

修復技術部

名 称	使 用 目 的	備 考
太陽追跡曝露試験機	修復材料の耐候性試験をする。	スガ試験機

研究施設・設備

名 称	使 用 目 的	備 考
プラズマ装置	酸化した出土金属遺物を水素プラズマを利用して還元処理をする。	神港精機 MP1017
紫外線フェードメータ	塗料, 有機質材料の耐候性試験をする。	スガ試験機
大型ステージ顕微鏡	文書, 染織品等を平置のまま構造を観察できる大型移動ステージ (1×1m) を備えた光学顕微鏡	三啓 SLP-1000
走査型レーザー顕微鏡	レーザーを走査して, 天然物などをきわめて深い焦点深度で観察し, 立体的な情報を得ることができる。	レーザーテック ILM21
耐候性試験機	修復材料他の耐候性試験をする。	スガ試験機, サンシャインウェザーメーター
真空凍結乾燥機	水漬有機物の真空凍結乾燥処理を行う。	共和真空
ガス腐食試験機	修復材料他の汚染ガスの影響試験をする。	山崎精機
酸性雨試験機	酸性雨物質による修復材料の試験をする。	板橋理化
材料試験機	修復材料の曲げ, 圧縮強度等の試験をする。	島津製作所オートグラフ
赤外分光分析計	文化財や修復材料物質の同定などを行う。	島津製作所 FT-IR8500

国際文化財保存修復協力室

名 称	使 用 目 的	備 考
微量少部付全自動 X線回析装置	微量の試料で, 顔料, 金属, 岩石などの鉱物同定を行う。	マックサイエンス MP-XHF-SRA
レーザー回析式粒度分布測定装置	土器や煉瓦などの粒度を調べ, その特性を明らかにする。	島津製作所 SALD-3000
比表面積・細孔分布測定装置	岩石や煉瓦などの劣化状況を把握する	島津製作所アサップ2400

4. 黒田記念室

黒田記念室は、本研究所の創立者帝国美術院長子爵故黒田清輝の功績を記念するために設けられた陳列室であり、黒田清輝の油絵・素描・写生帖等を収蔵している。

創立当時、主として黒田家から寄贈されたものは、油絵125点、素描170点、写生帖等であるが、その後黒田照子夫人、樺山愛輔、田中良氏等からの寄贈が加わった。収蔵品の主なるものは、「智・感・情」・「花野」・「湖畔」・「赤髪の少女」・「もるる日影」・「温室花壇」などである。

5. 閲覧室

本研究所情報資料部の図書・写真及び各種研究資料は、主として研究者・学者・美術関係専攻の学生等の利用に供している。

VI. 関係法規

◎文部省組織令(抄) (昭和59 政令第227号 最終改正 昭63政101号, 197号)

第2章 文化庁

第3章 施設等機関

(施設等機関)

第108条 文化庁長官の所轄の下に、文化庁に国語研究所を置く。

2. 前項に定めるもののほか、文化庁に次の施設等機関を置く。

国立博物館

国立近代美術館

国立西洋美術館

国立国際美術館

国立文化財研究所

(国立文化財研究所)

第114条 国立文化財研究所は、文化財に関する調査研究、資料の作成及びその公表を行う機関とする。

2. 国立文化財研究所には、支所を置くことができる。

3. 国立文化財研究所及びその支所の名称、位置及び内部組織は、文部省令で定める。

(研究施設の指定)

第115条 国立国語研究所及び国立文化財研究所は、法第5条第37号に規定する政令で定める研究施設とする。

◎文部省設置法施行規則(抄) (昭和28年 文部省令第2号 最終改正 平5文令14号)

第5章 文化庁の施設等機関

第4節 国立文化財研究所

第1款 名称及び位置

(名称及び位置)

第116条の9 国立文化財研究所の名称及び位置は、次の表に掲げるとおりとする。

名 称	位 置
東京国立文化財研究所	東京都台東区
奈良国立文化財研究所	奈良県奈良市

第1款の2 東京国立文化財研究所

(所長)

第117条 東京国立文化財研究所に、所長を置く。

2. 所長は、所務を掌理する。

(内部組織)

第118条 東京国立文化財研究所に、庶務課、次の5部及び国際文化財保存修復協力室を置く。

- (1) 美術部
- (2) 芸能部
- (3) 保存科学部
- (4) 修復技術部
- (5) 情報資料部

(庶務課の事務)

第119条 庶務課においては、次の事務をつかさどる。

- (1) 職員の人事に関する事務を処理すること。
- (2) 職員の福利厚生に関する事務を処理すること。
- (3) 公文書類の接受及び公印の管守その他庶務に関すること。
- (4) 経費及び収入の予算、決算その他会計に関する事務を処理すること。
- (5) 行政財産及び物品の管理に関する事務を処理すること。
- (6) 庁内の取締りに関すること。
- (7) 前各号に掲げるもののほか、他の所掌に属さない事務を処理すること。

(美術部の二室及び事務)

第120条 美術部に、第一研究室及び第二研究室を置く。

関係法規

2. 第一研究室においては、わが国の上代、中世及び近世の美術並びに東洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
3. 第二研究室においては、わが国の近代及び現代の美術並びに西洋美術に関する調査研究を行い、及びその結果の公表を行うとともに黒田記念室に関する事務をつかさどる。

(芸能部の三室及び事務)

第121条 芸能部に、演劇研究室、音楽舞踊研究室及び民俗芸能研究室を置く。

2. 演劇研究室においては、演劇及びその保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
3. 音楽舞踊研究室においては、音楽及び舞踊並びにこれらの保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
4. 民俗芸能研究室においては、民俗芸能及び保存に関する調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(保存科学部の三室及び事務)

第122条 保存科学部に、化学研究室、物理研究室及び生物研究室を置く。

2. 化学研究室においては、文化財及びその保存に関する化学的調査研究（分析化学的調査研究を含む。）を行い、並びにその結果の公表を行う。
3. 物理研究室においては、文化財及びその保存に関する物理学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。
4. 生物研究室においては、文化財及びその保存に関する生物学的調査研究を行い、並びにその結果の公表を行う。

(修復技術部の三室及び事務)

第122条の2 修復技術部に、第一修復技術研究室、第二修復技術研究室及び第三修復技術研究室を置く。

2. 第一修復技術研究室においては、木、漆その他次項及び第4項の材料以外のものを材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
3. 第二修復技術研究室においては、紙、布又は革を材料とする文化財の修復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。
4. 第三修復技術研究室においては、石、土又は金属を材料とする文化財の修

復に関する科学的、技術的調査研究を行い、及びその結果の公表を行う。

(情報資料部の二室及び事務)

第122条の3 情報資料部に、文献資料研究室及び写真資料研究室を置く。

2. 文献資料研究室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る文献資料その他の資料(写真資料を除く)の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

3. 写真資料室においては、第118条第1号から第4号までに掲げる各部の所掌に係る写真資料の作成、収集、整理、保管、公表、閲覧及び調査研究を行う。

(国際文化財保存修復協力室の事務)

第122条の4 国際文化財保存修復協力室においては、世界の文化財の保存修復に関する国際協力、資料収集、調査研究及びその結果の公表を行う。

(客員研究員)

第122条の5 東京国立文化財研究所に客員研究員を置くことができる。

2. 客員研究員は、所長の命を受け、東京国立文化財研究所において行う調査研究に参画する。

3. 客員研究員は、非常勤とする。

東京国立文化財研究所要覧 (平成6年度)

平成7年12月1日 発行

発行所 東京国立文化財研究所

〒110 東京都台東区上野公園13-27

電話 (3823) 2241 (代表)
